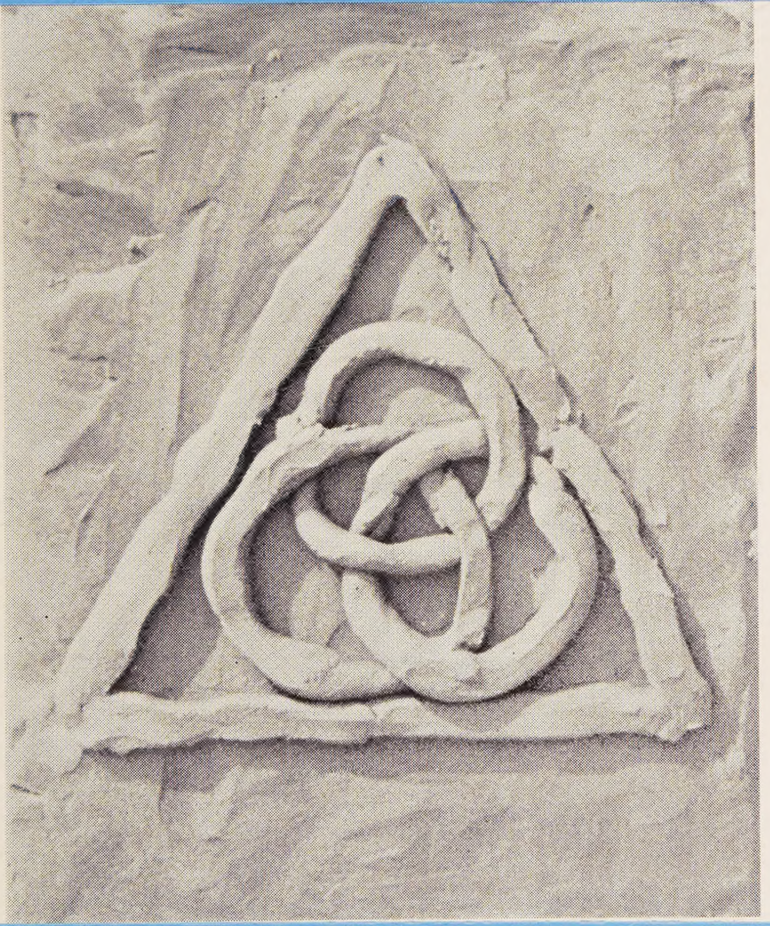
教会教育

昭和二十八年八月十日第三種郵便物認可
昭和三十六年六月一日発行　毎月一日発行　第九巻第六号



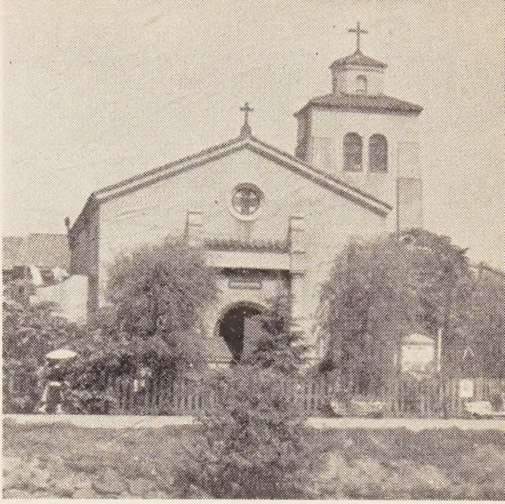
6

1961

激動する時代におけるキリスト教教育

1961　6　目　次

国際政情の社会文化の激しい移り変りのようすは、ラジオや新聞で、やや具体的に私たちが見聞きすることが出来る。しかしこうしたものは、とらえ易い中点であって、これから起って来るところの数々の波紋は、はたして認識されているだろうか？いつの間にか、たゆとうように波にゆられているうちにキリスト教は水づいてしまってはいないだろうか？　かつてキリスト教は社会に多くの貢献をなして来た。今はどうか？　この時代にあって教会が、キリスト者が教育的使命に真剣に取り組まなかったら……こうした課題を取り上げてのパネル・ディスカッションが教会学校全国大会でなされたが、それらの先生方に、時間の関係上語り得なかった事をも含めての御意見をもって今月号に御登場いただいた。



日本福音ルーテル

博多教会

博多教会は、戦災にあうまでは、福岡市内の博多のまん中にあったが、戦後、教会から少しはなれた所にあった南博幼稚園といっしょに現在の十カ川のほとりに移転して、会堂と幼稚園をたてた。会堂はスパニッシスタイルの大会堂で、いかにも南国九州にふさわしい姿を、市内の中央目抜きの近くにそびえさせている。

この教会は、ルーテル教会としては古い方で、初代牧師山内量平から、青山彦太郎、値賀虎之助、山内六郎、坪池誠を経て、現在はこの教会の教会学校からの出身者である白髭市十郎牧師が主任者として働いている。教会設立は明治三十九年だから、今年は五十五年目にあたるので、信者の中にも、二代、三代の者が多く、家庭信者が多いのも特徴の一つである。幼稚園も、また古い由緒を持っている。〈福岡市下鰯町一番地〉

経験は新しい経験によって更新されつづけて成長し、個人が環境を自己の生活のために利用する形式としての習慣が形成されてゆく。その場合に個人は意識して環境に働きかけて環境を変化させ、さらに変化された環境は個人に逆に影響して変化を及ぼし、そのところに経験が引き起される。経験とは個人と環境の間にある意識された行動的相互関係を意味する。そこからプロジェクト法と問題解決法の学習方法が導びき出される。このような教育観は近代文明を形成した科学的思考の探求の方法であるというのである。それは同時に社会的経験として近代民主主義が最良の政治形式であるのみならず人生観であるとして、民主主義を継続的たらしめる教育方法であるとされる。かくて学校は教育的方法的に純化されて形成された民主社会として、その中で子供たちが民主社会の一員として成長してゆく教育的環境であらせようとする。

ジョン・デューイを主唱者とした「進歩主義（プログレシビズム）」教育は、限りなく発達する科学によって断え間なく変化する社会に適応しうる人間の形成を目指しているのであるが、そこには恒久的真理や法則や価値基準は認められない。そこで変化する社会の中で、変らない社会的伝統と文化的遺産を後進者に伝達するための本質的教科材を主張する「本質主義（エッセンシャリズム）」がデューイ派への批判的立場を取るのである。本質主義には、宇宙には変らない一定の法則があるとするリアリスト（ブルーダー等）また究極の実在である神に根拠を置くアイデアリスト（バトラー等）の二派があるが、いづれもデューイの激しい批判者である。にもかかわらず本質主義者たちは、学習指導法においては決して旧い型の注入的主知主義によらないで、新しく改良された合理的教授法を採用している点は充分に注目しなければならない。

今日の日本の教育原理の面で、新教育の反省とともに、本質主義の研究がなされ、進歩主義と本質主義の建設的な統一が試みられつつあり、またプラトンより近世ドイツ哲学までの伝統に基づいて、新しい教課過程と教授法を確立しようとの努力もなされている。このようにして現今の日本の教育学は実に多様を極めているということができる。

普通教育に教会学校のづれ

戦後一五年間に発達した日本の教育が、古い伝統が壊れ新しい民主国家として再建された日本の社会の必要に適応するために、また朝鮮戦争以来急速度に進展した日本の工業の発達に伴う科学技術の要求とにより、デューイのプラグマチズムの教育学が強く影響されたことを否めない。そのため教育方法の面に急速な変化を来らしめた。教育技術の面での変化は原理的にデューイ学派の立場を取ると否とにかかわらず、日本の本質主義者と見なされる人々によっても、ほぼ同様に新しい合理的効果的方法論を採用していることを重視しなければならない。そこでどのように教育方法的に改変されたかを、普通教育と教会学校の現況との対比によって考察しよう。

概観的に言えば、普通教育は主知主義より行動的に、教師中心より児童中心に、教師の教授より児童の学習活動の重視に、教科中心より児童の生活経験の強調に移ったのが実状であり、教会学校は依然として旧い型のままで存続していることである。

普通教育は生活経験学習を採用するけれども、教会学校は今もなお教科中心であり、時代と社会の変化および今日の子供の生活への関心を殆ど持っていないのである。

学習指導方法では、普通教育は教授法の多様性を採り入れ、視聴覚教材、討議法、問答法、問題解決法、プロジェクト法、ドリルによる自学自習等が用いられ、児童の個性、個人差、能力、興味、関心、必要、動機づけ等に非常な注意が注がれている。けれども教会学校では、童話法と講義法が方法論の殆ど全部を占め、よって教室活動では教師本位であり、著しく伝統主義によって支配されている。

普通教育は、児童の自己活動による学習を重んじ、自己活動の場として、教師は環境整

激動する日本の教育と教会学校

土山牧羔



百年の速い歩み

過去一世紀の間に日本の教育は、急激な変化とともに異常な発展を成し就げた。徳川末期に存在した寺子屋は、一般庶民の教育を担当する重要な任務を果していた。寺子屋教育の地盤の上に、明治初年の新しい学制による小学校が義務教育として発達した。フランスの学校制度とアメリカの教授法の影響とともに、学校教育はドイツ風の国家主義が支配的となっていた。年とともに教育思想も教授方法も学校行政も、度重なる改革により進展していった。大正末期より昭和初期にかけて、「新教育」が唱導され、新しい胎動を見ていたが、やがて満州事変より第二世界大戦にかけて超国家主義による「皇国民の錬成」が教育の全領域を占有するに至った。しかし終戦とともにアメリカの占領政策による教育改革が行われ、新教育が採用され、「市民社会の人間形成」としての根本的教育革命が遂行された。そして戦後の一五年間に日本社会の変革の推進の中で、新教育の正しい理解とともに、反省的に修正され、建設的な改善が試みられつつ、次第に日本社会の地についたものとして根を下してきた。さらに最近においてはカリキュラムの訂正がなされ、基礎学力の向上に努められている。

さて明治維新の頃にはじまった日本の教会学校は、普通教育の飛躍的進歩に比較して、百年前の寺子屋の時代と殆ど変化していないのはどういうわけだろう。もちろん視聴覚教材を少し取り入れたことや、カリキュラム表の改良や、教案の発達や、その他の変化はあるにしても、教会における教会学校の実践そのものは、古い伝統の固い殻の中に閉ぢ込もっていて、実際の教会学校の教室は百年前の寺子屋を思わしめるものがあるのは否定しえない。「いつまでも変りたまわないイエス・キリスト」に出会う人間の社会は変化しているのであるゆえに、その過程を導びく教会学校の教育活動は、「この時代の子供たち」に対応した適切な改革をなさなければ、充分な役割を果しえないのではなかろうか。

教育原理の現況

戦前の教育原理は主としてドイツの学風によっていた。けれども戦後はアメリカの教育思想が主流を占めるようになった。まず理念より出発して教育目的を設定し、それへの教授法を考えた以前の教育原理に代って、社会にある子供の現実より出発して子供の生活経験そのものを方法的に導びくことに教育の中心を見出そうと今日の教育原理は意図している。新しい教育原理に圧倒的影響を及ぼしたのは、ジョン・デューイのプラグマチズムの教育学である。それは日常生活の中で諸問題に出会い、その問題の解決のために思考力を働かせて仮定的観念を産み出し、それを実際に「試みる」実験的な実際的な経験の過程を通って、自己の身についた知識を得るというのである。さらにその知識は新しい試みとしての実際的行動を導びく新しい仮定となり、限りなく実践が実験的に行われつづけ、旧い

出合わせ、教会の交りの中でキリストの弟子となって、此の時代への立証者とならせること」を果すために、より良き方法を選ぶ責任を果さねばならない。そのために、いくつかの提案をしよう。

1　原理について――われらは「個人的信仰と経験学習」との間の関係について討究しなければならない。それは「信仰と学習」の関係であるとともに、さらに「人格的なものと経験的なものの関係を理論的に解明することである。そして教会的経験の伝達は、いかにして個人的信仰の成育をもたらすかについて究明しなければならない。

2　カリキュラムについて――福音的教材とキリスト教生活経験（教会と社会における）の綜合が積局的になされねばならない。客観的真理としての教材は、キリスト教生活経験を媒介として、はじめて児童の中に主体化されることができる。そうでないならば教材として与えられたものは真に児童のものとして人格的に把握されない。それゆえに単に教師用の教案のための教案要目の作制のみではいけない。教案り編集出版者は、生徒が教室で活動するための工作教材やドリル問題集のハンドブックを生徒用に作るべきである。

3　学習指導方法について――教師のみが活動して児童は単に聞く受動的立場におかれるのではなくて、教室活動は教師と生徒の共同活動でなければならない。教師は正しく導びき、生徒は自ら教師に模倣しようとして自己活動するようにしなければならぬ。自覚的信仰者の育成は、自覚的学習により、学んだ事柄が確信となるように導びかなければならぬ。「自己活動による学習」は主体的学習であって、教師の指導への自由応答をうながすアプローチを関接法的に導びくのである。かくて教会的交りの中にある主体的信仰者として形成されてゆく。具体的方法として、幼稚科より小学校三年までは、聖書物語や現代的教会生活に関した製作品を工作法によって作製させつつ、教師と児童が教案に従って語り合う方法である。絵をかかせたり、予めプリントした型紙を着色し切抜いて貼り合せ、立体パノラマを作ったりする。目で見る教材を、共に語り合いつつ、作る経験を通して学ぶ。小学校上級は、ドリル問題を、自分で聖書を読み考えて解答を書き、その間に教師や級友とともに問題の解決につき語り合う。ドリルは一般書店に販売されている国語、社会、等の小学生のドリルを参考とするのがよい。中高生は、講義の外に討議、ロール・プレー、研究発表、バズ・グループ、プロジェクト等の諸方法を活用すべきである。

4　教室活動について――小学校の一時限にならって、四十分の分級をまず先に充分に行うべきである。その後で約十分余の礼拝を簡潔に行うべきである。礼拝は科別礼拝とし、講話中心でなくて礼拝経験を真に生徒の中に起すことが重要である。長い時間のさわがしい礼拝よりも、真に神の臨在に触れている礼拝の経験を短い時間で持つことの方が大切である。分級の先に礼拝をすることは、それまで場外で遊んでいた心理的混乱からすぐ心を落ち着けて礼拝の気持になりえないゆえに、分級を先にし、その後で礼拝をするのがよい。

5　教室外活動について――月曜より土曜までの生活経験の中に、いかに信仰を生かすかを自ら考え実践させるように、ハンドブックを考案したい。また両親の影響がキリスト教教育に及ぼす諸問題について考え、祈りや愛や道徳生活に対する両親の態度を指導すべきである。

6　教師の訓練について――新しい明日の教会学校は新しい教師を必要とする。キリスト教育の原理や聖書学や神学の講義のみに終始しないで、実際的学習指導法について更に多くの時間を、教師研修会において用いるべきである。教師養成講座の持ち方を改善する努力を要する。

7　その他――経費や設備、その他多くの問題があるが、積極的に建設的に考え、可能な範囲で出来る限りの努力をすれば決して困難ではないと思う。

（大阪基督教短期大学長）

備に多大の意を用いる。自分の所属したいクラブに参加して課外に特別教科活動としてクラブ活動に従事させる。しかし教会学校では、教師のみが活動していて、児童は受動的で学習活動する分野が与えられず、また教師と児童の共同活動が計画されていない。

普通教育では児童の生活としての遊戯として非形式的に楽しく興味深く学習するが、教会学校では児童の生活より遊離してしまって楽しい遊戯として聖書と教会生活を学ぶといった面に欠け、全く形式的で固定化されてしまっている。

普通教育の教科書は非常に進歩して、美しい絵本そのものであり、児童に親しみやすく魅力的にできていて、自ら教科書を読もうとする関心を引き起しうる。しかし教会学校では小さい文字ばかりで関心を持てず、紙表紙の粗末な尊敬心を持ちえない一番安価な聖書のみが小学校一年生より与えられている。

普通教育では教科がすっかり変って、小学校一年生より、社会、理科、音楽リズム、家庭等の学科目ができ、自然観察や、社会見学や、リズム合奏や、ハーモニカやシロホンの器楽や、家庭生活等の学習が楽しくなされ、美しい観察絵本のごとき理科教科書や、絵本化された楽譜の音楽リズムの教科書が児童達の手に与えられている。しかし教会学校は、このような面に無関心で、単に天地創造の説話をなし、社会道徳の講話をなし、昔の唱歌の本のような「こどもさんびか」を用いるか魅力のない墨書の大きな歌掛けで讃美歌を歌わせるのみである。

普通教育では、教師は権威者であることをやめ、行政的児童管理の教室観を排して、社会全体への奉仕者として児童に「サービス」をする者としての助育（ピューピルズ・パーソネル・サービス）をなし、児童との教育助談（パーソナル・カウンセリング）に努め、児童の学習上の精神衛生を配慮して学習意欲を喚起させ、問題児については家庭環境における家族関係に注意し、両親との面接と教育相談を盛んにし、授業参観に母親を度々招き、父母と教師の教育的協力に励んでいる。けれども教会学校では、教師は権威主義的であり、さわぐ子、けんかする子、手におえない子、話を聞いていない子、脱落する子、その他の問題児について、権威的に直接的説得や訓戒をするか、手におえず放任するかして、適切なカウンセリングをなしえないし、家庭との連絡や両親との教育助談はなされず、家族へのキリスト教教育の手が打たれていないで、キリスト教教育におけるパーソネル・サービスは施されていない。

普通教育では以上のような手続を経て、教師は児童に自分は「愛されている」「受け入れられている」「欲求されている」との意識を与え、愛されたい、受容されたい、欲求されたいとの本能的衝動を満足させることにより、教師と同級生への「所属感」を充し、よって情緒の安定または安定感が与えられ、教師の学習指導への心理的動機づけが児童の側になされ、教師の活動に自発的に模倣し導びかれようとの態度がつくられ、人格形成が正常になされるように努めるのである。しかし教会学校では、このようなことが充分に考慮されていないので、児童の側に欲求不満が起り教会学校より脱落してゆく。

普通教育では、教員の教養が向上し、戦前の師範教育に対して、四年制大学で社会人としてこの教養とともに教員に必要な訓練が非常に多く施されるのは反して、教会学校教師の訓練は不充分である。また小学校等の校舎や教具や教材が非常に改善されているのに、教会学校では、それらに不足している。その他について言えば際限がない。しかし一言して言えば、今日の普通教育と教会学校の間には余りにもおびただしいづれのあることを否定できない。

明日の新しい教会学校を目指して

教会学校の現状について悲観的になってはならない。キリストから委託された大なる課題、すなわち「永遠に変らぬキリストに、絶え間なく変る時代の状況の中で、子供たちを

る。

今日の社会変動を、経済学者は資本主義の高度成長といい、社会学者は大衆社会状況の出現とよんでいる。すなわち、敗戦によって戦前の三割にまで低下した日本の工業生産は、昭和三四年には実に戦前の四倍にまでふくれあがった。生産の量が増加し、日本経済の規模が大きくなってゆくにつれて、国民の消費生活も著るしく高度化した。「消費ブーム」とよばれる現象が、国民の一部にだけでなく、かなり広汎な層にまで及んでいることはすでに周知の事実である。

以上のように高度化した経済では、技術革新の占める役割はきわめて大きく、従ってそのために巨大な資本が必要となる。資本主義経済の高度化が、巨大資本による独占の激化をもたらすことは以上の通りである。それゆえ現代社会においては、独占資本につらなる少数の人びとによって、経済・社会・政治が意のままに支配されることになる。ある経済学者によれば、今日の日本の経済・社会・政治を支配するものは、四千万有業人口の精々三パーセントのものにすぎない。これら少数者の支配下におかれている企業体の商品を、国民一般は消費者として消費しているわけである。先に述べた経済の高度化は、高度な消費生活を必要とし、高度な消費生活があってはじめて経済の膨脹が可能になるのである。そこで見のがしてならぬ点は、消費者としての一般国民が、独占資本の指導下に立たされながら、時にはみずからの主体性を失いつつ消費生活を通じて盲従をよぎなくされていることである。

消費者として主体性を失うものは、同時に生産者としても同様の立場に立っている。技術の高度化に応じて機械化され合理化された職場では、ひとりの人間は歯車のひとコマの地位に追いやられ、組織の中にまったく埋没をよぎなくされる。もはや、生産者としての人間は、その創意工夫を活かす余地はまったくなく、そこにおいては人間でありながら人間らしさを保持することさえできない場合が多い。従って、そのような組織の中においては、一八世紀的な立身出世のごときものは夢物語と化してしまっている。

経済活動の中における以上のような人間の主体性の喪失は、社会における人間の位置を従前と著るしく異ったものとする。すなわち、人間は社会の動きの中に巻きこまれ、大きな組織や集団の中に埋没することをよぎなくされている。そこでは、ひとりの人間の価値は、その人間のはたす機能によってのみ評値され、その人間そのものの価値は無視され、もはや人間の人格性はかえりみられることは少ない。しかも、現代の人間は、そのように自分を疎外する組織や集団の中に身をおくことなしに、社会生活を営んでゆくことはできないのである。

これが社会学者のいう大衆社会状況であるが、そこでは人間は次第にその個性を失いつつロボット化の方向をたどる。あるアメリカの社会学者が、現代の社会にはもはや奴隷は存在しないが、ロボットがいるといったのもこのことであろう。自分の信ずるところを貫き、人が何といおうが断然自分の意志をおしとおすようなタイプの人間は、今日の社会では反社会的な異端とみなされる。現代人は、自分自身よりも常に他人の志向に気をくばり、それに適応することに最大の努力をはかっていく。人間のレーダー型化といわれるのは、このような傾向を示すものである。まさにこれは人間の危機である。しかも、消費生活の向上と物質的文明のただ中におけるこのような危機は、それほどさし迫った危機感をあたえない。むしろ、物質的繁栄をエンジョイしつつ、人間はそこに安定したものをさえ感ずる。このような危機感を伴わぬ危機こそ、最も警戒すべき危機にほかならない。

以上のような社会的変動は、もちろん、日本の現代社会にのみ特有の現象ではない。世界の後進国にも、先進国にも、ニュアンスの

社会的変動から見るキリスト教教育のあり方

工藤英一

一、社会変動の確認

一七八〇年七月、イギリスの工業都市グロスターの印刷業者であったロバート・レイクスは、その頃親からも社会からも見放されていた貧しい子供たちのために、はじめて日曜学校を開いた。これが教会における日曜学校教育の起源であることは、すでに周知の通りである。レイクスが教育の対象として責任を感ぜざるをえなかった子供たちは、当時の激しい社会的変動によって生じた貧民層の子弟たちであった。この当時の社会的変動は、産業革命といわれているものであって、一八世紀から一九世紀にかけて、イギリス社会にはめざましい工業の発展が起り、その影響として貧富の差が大きくなって、はなやかな都市の片隅に悲惨なスラム街が発生したのであった。中世以来の人間同志の助けあいや協同は急速に影をひそめて、富めるものはますます富み、貧しいものはますます困窮するという自由主義と個人主義とが、当時の最も支配的な社会関係となっていった。このような社会的変動の中にあって、レイクスは、社会の底辺に追いやられた子供たちの「良い隣り人」となるための日曜学校を開設したわけであった。

現在のわれわれの社会は、このレイクスの時代の変動に比較することのできぬ程の規模と激しさとをもって、激動のただ中にある。それは後に述べるように、単に社会の形態的な変動にとどまらずに、「人間の危機」とよばれるような深刻な相様を呈している。この社会的激動がはたしてどのようなものであるかを理解し、現代のキリスト教教育のおかれている社会的状況を改めて認識し、それに対処するキリスト教教育のあり方の方向をさぐり求めようとするのが、この論稿の意図である。

二　社会文化の発展と人間の資材化

日本の文化、芸術を紹介しているある外国人の著書には、日本は急速に変りつつあって古来のよいところがつぎつぎに壊されているから、日本を訪ねるなら早く訪ねばならぬと書かれてあるという。古い伝統的なものが急激に破壊されていくばかりでなく、一〇年前には想像もできなかったような新らしい生活の形態が出現したかと思うと、いつの間にかそれが更に新らしいものによって置きかえられるというのが、昨今の日本社会の状態なのである。敗戦の放送を「今晩からやっと安心して眠れる」という感慨で聞いた人びとは、デラックスなマットレスの流行を想像できなかったのであり、いわんやおびただしい睡眠薬の氾濫などは夢想することさえできなかったのである。

このような生活の変化のテンポの早さは、数年来の週刊誌の流行に示されている。一部では週給制ということもいわれている。しかし、「激動する時代」という場合に、われわれが注意しなければならぬのは、ただ単に変動の速度のみを考えるのではなく、むしろ変動の質的な内容を重視する必要がある点であ

ことだけに終っているというようなことはないだろうか。キリストについてのいかに豊かな知識を与えても、それは正しいキリスト教教育とはいえぬことはいうまでもない。問題は、キリストそのものを、いかに教えるかということである。しばしば指摘される今日の教会学校の教育方法の幼稚さへの批判や反省も、以上の根本問題との関連においてなされねばならない。周囲の社会状況が、人間の人格性を無視し、これをないがしろにしようとする中にあって、人間が創造主である神との関係においてどのようなものであるかを教えることこそ、キリスト教教育の課題であるといわざるをえない。

四、キリストの手となる教育の姿

激動する時代におけるキリスト教教育の課題が、失われつつある人格性を確保する人間形成としての教育を強力に推し進めることであることは多言を要しない。それは、激動する時代の中にありながら、常に教会が不動の目標として掲げてゆくべき課題である。しかし、この課題にむかってとるべきキリスト教教育の姿勢こそが問題なのである。

もし、キリスト教勢力の拡大や制度としての教会の拡充だけを意図する姿勢がとられたならば、それは本来のキリスト教教育または教会教育といえるであろうか。主は、そのひとり子を賜うほどにこの世を愛しているのであって、世の救いのためにそのひとり子を十字架につけたのである。それゆえ、キリストのからだとしての教会の姿勢は、「この世のため」という姿勢をもちつづけねばならないのである。その点においてキリスト教教育も教会教育も例外ではない。

しばしばいわれることであるが、激動する時代に順応ばかりしていては、真理としての福音を伝えることはできないといわれる。しかし、教会が世に仕える姿勢をとるということは、激動する社会の中に埋没してしまうことではなく、世の中に適応するように福音を水ましすることでもない。キリストの受肉が示すように、教会がこの世の問題を自分自身の問題として受けとめ、そのために社会の中で手を汚してみずから苦悩する時、教会は真に自己の使命に忠実な真の教会となりうるのである。激動する時代のキリスト教教育は、このような教会の使命という最も根本的な問題に立ちかえって、その在り方をもう一度みずからに問いただすべきではなかろうか。

激動する社会状況の中でキリスト教教育が直面する具体的課題として、われわれは多くの事項をあげることができる。その一、二については多少触れたところであるが、問題はなお山積している。たとえば、経済の高度成長といい、消費ブームといわれる現代の日本社会には、経済的繁栄の恩恵に浴しえぬ階層のあることを見のがしてはならない。そのような階層への社会教育的配慮は、教会にとっての重要な現代的課題なのである。もちろん、今日の日本の教会において、以上のような課題に積極的に乗り出している教会は実に微々たるものである。日本の教会または教会学校には、そのようなプログラムを展開するだけの実力がないということが弁解としてしばしばいわれる。しかし、教会が社会の苦悩を自己のものとする努力のなされていないことが何よりも問題である。その証拠として、教会教育の教材として身近かな社会の問題が活かされることがきわめて少ない。この辺に今日のキリスト教教育の反省すべき具体的な問題があろう。そのような教材が活用されることによって、激動する社会の中に身をおき、その濁流に全身を洗われながら、あくまでもその濁流に抗することを諦めないような人間の形成が期待しうるのである。だが激動する時代におけるキリスト教教育は、教会の使命に対して忠実なものでなければならない。現代のキリスト教教育はその意味で、世に仕える教育であるべきだといえよう。

（明治学院大学助教授）

相違こそあれ、激しい変革が起りつつあるのである。しかも、その激しさは後進国になればなるほど、甚だしいものといえるようである。アジヤやアフリカの社会には、先進国がすでに経験した産業革命的な社会変革と、先に述べたような現代的変革とが、きわめて集約された形で起りつつあり、それがきびしい社会的摩擦を巻きおこしつつある。世界の教会は、このことに眼を開きながら、教会だけがこのような社会的変革に巻きこまれずに超然としていられるかどうか、また教会がそのような変革の中で教会の使命をはたしていくにはどうしたらよいかといった問題に真剣に取り組もうとしている。日本における現代のキリスト教教育にたずさわるものも、当然このような問題を、自分自身の問題として考えていかねばならないのである。

三、人間とは何かの教育

激動する社会の中にあるキリスト教教育のあるべき姿を考えるに先立って、われわれはまず、右に述べたような社会的状況が、キリスト教教育にどのような影響をあたえているかを検討したい。最近さまざまな形で問題にされているように、現代社会では、教育というものはその実利的効果に即してのみ考えられ、教育を一種の投資とみなすような考え方が支配的になっている。もちろん、このような教育観は、高遠な学理を説く教育学の書物に見出されるものではなく、世間一般の人びとの心の中に強く植えつけられつつある教育観である。いわゆる有名校に手段を選ばずに入学させようとする父兄の態度や、あらゆる教育の場が上級学校への受験準備の場に化している現実が、右のような教育観の根強さを物語っている。このような現象の原因として、生活水準の向上が世の親たちの教育的関心を高めたということも考えられよう。しかしこのような現象は、その多くが、先に述べた社会状況の反映であると考えざるをえない。教育が、ひとりの人間を人格的に形成して行くことである点が忘れられて、将来獲得するであろう社会的地位のための資格を身につけるためのものとなってしまっている。すぐれた人格や勤勉・努力が高く評価されて、特別の地位を職場の中であたえられるといった出世物語は、もはやまったく夢物語になってしまっている。一流会社に就職させるには、それにふさわしい学歴を経ていなければならない。それゆえ、何とかして、志望の会社なり学校なりに通ずるエスカレーターに一刻も早く乗せることが、世の親たちの教育関心の最大のものとなっているわけであろう。

このような教育への考え方が、正しい教育のあり方にとって危険な曲り角であることはいうまでもない。しかも、それらの考え方がキリスト教教育、特に教会教育にむけられた場合、日曜の朝、教会学校に行くよりも、進学教室へでも行ったほうが、遙かに子供のためになるという考え方が生まれてくる。そのことを反映するかのように、教会学校出席者は次第に減少の傾向をたどっている。このことは、教会学校関係者にとっては、切実な問題である。この問題の処理をめぐって、さまざまな議論が闘わされよう。しかし、その議論が、現代の社会的状況を常に背後に意識しつつおこなわれなければ、おそらく生産的な議論とはならないだろう。世間の親たちをただ非難するだけでは問題が展開しないのである。

教育が今日実利化されていることは先に指摘した。そのことは、教育の機能化といってもよかろう。全人的教育よりも、特殊な技能や知識の附与をもって教育とする考え方の背後には、やはり今日の社会的状況の影響のあることは容易に理解される。キリスト教的人格教育の立場から、このような現実を常に批判すべきことはいうまでもないが、しかし、現実のキリスト教教育自身がこのような弊害を内に蔵してはいないだろうか。現実のキリスト教教育が、単にキリスト教的知識を与える

責任意識の稀薄性ということでしょう。ここには日本の異教的地盤という大きな制約が横たわっていることも、キリスト者のうちにある人間的な弱さと関連して認めないわけにはいきません。しかし、教会とこの世との分離、キリスト者のこの世に対する連帯感の稀薄性には他の原因も、しかも私たちの教会内にそれが醸成されてきはしなかったかと、自問自答を迫まられるのです。

それは感じるままに言うならば、福音に仕えるべき神学や聖書知識が、逆に福音を使って教会を指導することはなかったか、ということです。

このことは、教会学校に関しても考えられることです。とにかく、聖書知識のある者が教師という名前をもって、生徒たちに聖書知識を教える。そして一週間のうちの聖書学習のわずかな分級時間が、教会学校のすべてになっているという事態です。

こうした傾向の中では信仰の共同体とか、この世の多くの人びととの連帯性に生きるキリスト者が形成されないことは自明の理です。むしろそこでは教会の自己保身とか、キリスト教的知識人の養成とか、キリスト教的自己満足か達成されていくにすぎないものになるでしょう。私たちは、パリサイ人、律法学者たちの宗教的堕落が、現代においても教会を動脈硬化症におとしいれていることを謙虚に覚えていかなければならないと思います。

観念的教会から福音的教会への脱皮、そこにこそ激動する時代に塩となり、光となる教会があり、教会学校があると思います。それでは、その脱皮はいったいどのようにして展開されるのでしょうか。

自主的な聖書学習

第一に、聖書をすべてのキリスト者の手にしっかりとつかむことです。ある会合で私がバプテスト連盟には七〇%以上の教会が青年成人科を持ち、会員の七〇%以上がこれに参加していると言いましたら、「いったい、そんなに聖書を教えられる人がいますか」と聞き返されました。それは、「人に聖書を教えられるような神学的素養のある者がそういるはずはない」という立場からの発言だったのです。たしかに教師たちは、そのことをおそれながら、その任に従事していることでしょう。長い間、キリスト者たちは、日曜日になると、ただその日だけ専門家から聖書の話をきき、教えてもらうために教会堂にやってきたかもしれません。しかし今はキリスト者たちが、日々の生活の中で、何が神のみこころにかない、何がそうでないかを問われながら、みずからその解決を聖書にもとめていく姿勢を持たなければならないのです。このことは神学的研さんにおいても同様です。キリスト者の連帯性は、ひとりびとりが、日常生活の中で、聖書において主の呼びかけを聞き、こたえていくところから起こってくるものです。そしてそれは、教会のすべての成人たちが、ともに聖書を学び、あかしし合う時を持つことによって励ましを与えられ、互いのきずなを強くしていくことになるでしょう。そのようになってこそ、兄弟姉妹が共に守る礼拝は生気に満ちあふれるでしょう。

召命と献身の領域

第二に、主からの召命と私たちの献身とはあらゆる人びとに、また、いろいろな領域において起こらなければならないということです。召命と献身とは教職者になること以外の何ものをも意味しないというような気風が過去の教会の中にはびこってはいなかったでしょうか。聖なる領域に属する教職者と、俗なる領域に属する（平）信徒が教会の中で階層的に分離され、優劣の対象とされることはないはずですが、意識下にそれに近いものが横たわっていなかったとは言えないようです。実は、私はこの意識下にある聖俗観念が、教会とこの世との分離を招来した大きな要素に

この時代における教会学校の課題

岡村正二

教会は現代社会から遊離していないか

私がこの大会の主題を知った時にまず感じたことは、激動しつつあると言われる現代社会と教会との間に大きな距離が作られているということです。つまり、教会は世俗に対する福音の異質性とは別の意味で現代社会からかけ離れてしまっているのではないかということです。

教会は本来、地の塩、世の光としてこの世にありながら、この世を革新していく拠点であるはずなのに、その塩は味がなく、その光は弱く消え失せて、教会はこの世と無縁の存在になりつつあるのではないか、という恐れを感じるのです。激動しつつある時代の状況を見きわめることはもちろん大切ですが、それとともにこうした時代の中にあって教会がその本来の使命を回復し、真の教会を確立するために、自ら深く反省することが必要だと思います。

観念的な教会からの脱皮

さて、「激動する時代における一という表現は、キリスト者一般にはややジャーナリスティックなことばのように感じられるのではないでしょうか。しかし、私はそこに一つの問題があると思います。

それは教会ないしキリスト者の視野に関する問題です。ある人はこの主題を、「最近教会学校の生徒が目立って減少してきた。教会にほんとうに求めてくる人も少なくなってきたばかりでなく、教会を離れていく人が多くなってきたし、信者の教会生活もどうもにぶってきたようだ。これではいけない。これは宇宙時代だとか、所得倍増だとか、レジャーブームだとか言って社会のようすが急速に変わり、人びとがみんなそっちの方に押し流されていくからだ」と、ぬぐいがたい焦燥感をもって聞いているかもしれません。しかもそれは、これまで確信をもってみんなついてくると思っていたのに、ふりかえってみたら、だれもいなかったというような状態で——。

キリストは私たちの主であるとともに、この世の主であり世界の主であるということを教会は身をもってあかししてきたでしょうか。キリストは私たちの教会の主でこそあれ、他の人びとの主ではなかったかのようにされてはこなかったでしょうか。激動する時代と教会との間につくられた大きな距離は、このようなところから出てきたのではないでしょうか。

これはまた別の表現をかりるならば、教会ないしキリスト者のこの世に対する連帯感、



的な項目をあげ、私の責任を果たさせていただきます。

㈠ **青年成人層の聖書研究と自主活動**

聖書研究・交わり・伝道・奉仕の自主的な組織活動を持つ。ここでは、生活と直結した聖書研究（世話役員のリーダーをきめて教師の一方的な講義だけでなく、協力学習もできるようにしていく。時間は毎日礼拝を十時―十一時十分として、それにつづく四十分くらいが適当）、家庭集会を中心とした交わり（月一回）、クラスにおける伝道奉仕の実践活動（常時または随時に）などを行なう。青年から老人までの男女各層を包含したクラスを地域ごとに編成して、主にある家庭共同体を形成していくこともよい方策である。そのためにグループ指導者の養成と集団活動についての理解を教会全体に深めることが大切。

㈡ **教会学校は召命感をもった教師を立てる**

教師養成クラスを常設して、新しい教師の養成をはかり、教師に就任するに際しては、自己の召命感を披れきして立つようにする。牧師・校長は教会学校教師の使命を明確に熱意をもって示していくことが大切。

教師は生涯、教師として奉仕する決意をもっていなければならないが、それとともに、一年ごとに全員辞任して自己の信任を教会にゆだねるようでありたい。

㈢ **教会員全体のささえ**　教師の就任式にあたっては、教師の誓とともに、全教会員が教師をささえ、教会学校のわざに協力する誓約をしたいものである。

㈣ **教会学校活動の報告**　教会学校は、その働きをたえず教会全体に知らせていく必要がある。報告書の配布、いろいろなチャート、ポスターなどによるＰＲ、祈禱会などにおいて教師のこと、生徒のこと、クラスのこと、生徒の家庭のことなどを祈りの課題としてもらう。

㈤ **神の家族としての礼拝**　月に一度、子どもから成人までの合同礼拝をもち、生徒の合唱などによって子どもたちにも礼拝プログラムの一部に参与させる。

㈥ **準備**　教師は教案を読むまえに、自分で参照聖句の聖書研究をする。これは教案を聖書知識伝授の教科書ないしトラの巻とさせないために。

㈦ **方法**　講義式の教授方法に偏重しないで、生徒を参加させる学習方法や、視聴覚教授法の技術をもう少し習得していきたい。

㈧ **礼拝**　児童礼拝は讃美と交読、短かいアッピールにとどめて短縮し（一五分以内）、分級時間を充実させること。

㈨ **分級**　これでもって教会学校のすべてとしないこと。分級教案は教会学校の一部分であって、それをオールマイティーにしてはならない。最低月一回日曜日の午後のグループ活動を持つ。内容は奉仕、製作、リクリェーションなど。土曜日の午後もよい。また、子どもたちを自分の家庭に招いて、ひとときを過したり、子どもたちの家を廻って、子どもの家庭会を持つことが望ましい。時たま夕食会を持つこともよい。教師は分級時間、あるいはそれ以外のグループ活動のほかに、生徒と個人的な接触をもつようにつとめる。訪問、通信、ちょっとした機会をつかんでの会話などが大切。

㈩ **公同礼拝への接触**　教師はなるべく低学年生の時から、生徒が教会の礼拝に出席するように導く。

㈪ **機会をとらえる**　新しい教育技術を実践していくことは大切であるが、信仰告白の決断をする機会を生徒に与えていくことを忘れてはならない。

㈫ **ＣＳと家庭**　特に児童の場合、家庭にとどまっている主婦たちが教師になるように、教師の層を変えていくことが望ましい。教師となる経験が、家庭の中でそなえられているし、週間日の活動が職業青壮年よりも期待できる。また生徒の母親との接触もしやすく、ＣＳと家庭との結びつき、家庭への伝道のルートを強化することができるであろう。

なっていると思います。

　教職者が、特殊な任命を受けていることを自覚して宣教牧会の職に献身していると同じように、ひとりびとりの信徒が、各自に呼びかけられた特別な召命を自覚して、献身していかなければならないと思います。個々さまざまな召命に対する深い自覚と献身こそ、教会における指導的な力となるものであります。そのような任命と献身が職場にあるキリスト者に、学校にあるキリスト者に、農民であるキリスト者に、家庭の主婦であるキリスト者に見られなければならないのです。このことは、福音のもとにある教会が世俗から断絶され、そのままになっていく誤りから、福音によって世俗から断絶されたものが、同時に前よりももっと密接に世俗に接触していくという正しい方向へと教会を形成していく要素となるものです。教会学校の奉仕の場もまた、このような召命と献身の場にならなければならないと思います。

個人個人の存在価値が生かされるように

　知識的偏重にしても、信徒の献身問題にしても、そこには日本のインテリの観念的な傾向性や、今日の世俗の甘いささやきが、わずかな隙間をもくぐって、教会の中にはいりこんでいることを否定できませんが、教会における個々キリスト者の確立もむずかしい問題だと思います。「激動する時代におけるキリスト教教育」という主題に対して、教会の動脈硬化症を感じる原因がここにもあるのです。私たちは制度とか、慣習とか、地位とか、名誉とか、順序とか、あるいは時には謙遜とか、尊敬とかいう美名のもとに個人個人に与えられている価値を埋没させていることがないかどうか注意する必要があります。人格の喪失を回復する場所が、「キリストの愛のうちに生かされる私」の発見にこそあるとするならば、教会は神がその存在理由を与えておられる多種多様な人びとが生き生きと活動する所であるはずです。そのような教会であってこそ教会は激動する時代の中にあっても豊かな創意をもって賢明に処していくことができるでしょう。

会堂における教会生活からキリストにある教会生活

　最後に、すべてのキリスト者が、キリストにある乳飲み子の時（いやそれよりもキリストに敵対していた時）から導かれ、育てられてきていることを忘れずにいること。そしてその恵みの経過における数々の失敗の告白と恩寵のあかしをもって、この世にいることです。教会に来た新しい人びとの名前とか職業とか住所などをたずねながら、自分の紹介はいっこうにしないでいるというような状態は、すでに特有な教会人となっている姿にほかなりません。言わば、苦労を知らない坊っちゃんに貧乏人の苦悩を話してもわからないというような感じ方を、キリストを知らない多くの人びとにさせてはならないのです。これは会堂における教会生活からキリストにある教会生活への転進によって克服されなければなりませんし、非キリスト者に、こちらの側から接触していくという伝道的な前向きの姿勢への転身によって具現されていきます。

　これらのことを総括して、現代の教会学校における私たちのつとめは、主に対する応答であると思います。そして、今日という時代を、激動する時代ということばで表現することは、決してジャーナリスティックなことからではなく、主を仰ぎ見るキリスト者の歴史的意義からであり、社会的意義からなのです。

激動する時代における教会学校の具体的な課題

　最後に激動する時代における教会学校の課題として、枚数のゆるす限りいくつかの具体

はモーセと予言者達がいる。即ち旧約の教えが示されているから、それに聞けばよい。すると彼はいいえ御先祖アブラハムさま、もし死んだ者がひとりでも行ったら彼らは悔い改めます。しかしアブラハムは言った。モーセと予言者達に聞かないような不信仰な心では死んだ者の中から甦えって行っても、その言う事を聞かないであろう。

イエス様はこのたとえ話しで、何を私たちに教えようとなさるのでしょうか。金持と貧乏人が共に死んでみると生前の生活とは全く反対になったと言うお話です。しかも地上と天上との生活は全く違っているばかりでなく、一度死んでその人の運命がきまってしまうと、信仰の父であるアブラハムでさえも、もっとはっきり言うと神様でさえも、これを勝手に変更することが出来ないと言うことです。金持は生前に少しも悪い事は致しません。ただ金持の生涯を送ったと言うにすぎません。それだけでなく明らかに残りの食物を門前の貧乏人に与え、きたないぞと言って追い払ったりはしませんでした。これが金持の慈善で、残りの幾分かを施しますが進んで貧乏人を助けようとはしなかったのです。この金持の慈善に神様の祝福があるでしょうか。

金持であろうと貧乏人であろうと、一番大切なことはなんでしょうか。それはいつでも神さまの御心にかなう様に私達の生活をこの世においてしっかりとやりとげる事です。

桜井　享

―― 六月十一日 ――

愛とは何だろう

聖書　主は、わたしたちのために、いのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。

ヨハネ三・一六

やがて十年以上になります。一九四八年の一二月、二人の青年が北アルプスの北鎌尾根を、はげしい風と雪になやまされながら登ってゆきました。松濤明、有元克己、それがこの二人の青年の名前でした。二六才と二九才、二人は同じ大学を卒業した、仲の良い友だちでした。二人はいつか、ヒマラヤを征服したいと考え、何年もそのための準備をしてきました。その冬も、二人はからだをきたえ、技術を磨くために冬山の登山を計画したのでした。

二人は十分に計画をたてて北アルプスに出発しました。しかし、その冬は例年と違って気温の変化のはげしい冬でした。暖かい日が幾日か続いて雪がやわらかくなり二人の予定はくるいました。そして五日目の朝、突然きびしい寒さがおそいました。アイゼン（山靴に結びつける金具）も凍りはてて、最早進むことができなくなりました。二人は仕方なく雪洞をつくって避難しました。しかし、その時有元君ははげしい寒さのため凍傷におかされ、動くことができませんでした。有元君は松濤君に自分を置いて山を下りてくれたとたのみました。だが、松濤君は友人を見捨てることはできないと思いました。そして友人の側で静かに死を待ちました。

翌年、二人のからだが発見されました。松濤君のノートも発見されましたが、それには次のように書いてありました。「捨テルニシノビズ、死ヲ決ス」。又、ノートの終りにはこう書いてありました。サイゴマデタタカウモイノチ、友ノ辺ニスツルモイノチ」。松濤君と有元君は遂にヒマラヤに登ることはできませんでした。けれども、ヒマラヤのどの峯よりも高い峯に立ちました。それは愛の峯です。

主イエスは「人がその友のために自分の生命を捨てること、これよりも大きな愛はない」とお教えになられました。ただ、お教えになられただけでなく、私たちのために十字架におのぼりになり、生

児童説教

教会暦の後半
教会の期節が始まる

——六月——



六月から、いよいよ教会暦の後半にはいる。つまり主キリストのご生涯をたどった、アドベントから昇天までの期節が、今年は五月で終ったので、この六日から十一日までの六ヵ月間は、これまでの前半期において示された真理が発展して、それがキリスト教会における実際生活に、どのように生かされるべきかが、示されることになる。

そこで、この期節を、教会の期節と呼んでいる。福音書の中に示されている教え、譬え話、いましめ等が日課として選ばれているが、注意してみると、その内容は、うまく関連性を持ったものであるから、そうした統一性を頭に入れて、毎日曜の説教を進めて行くのがよいであろう。

この期節の日曜日の呼び方は、三一後第……主日といっているが、昔は、ペンテコステ後第……日曜日というように呼んでいた。三一後という呼び方は、三位一体祝日が採用されてから特に北ヨーロッパの方で採用されるようになったもので、ローマ教会や南ヨーロッパの教会、ギリシャ教会等では、今日でも、聖霊降臨後第……主日と呼んでいる。

——六月四日——

悔改めの必要

聖書　もし死人の中からだれかが兄弟たちのところへ行ってくれましたら、彼らは悔い改めるでしょう。　ルカ一七・三〇

或るところに一人の金持がいて、いつも立派な着物を着て、毎日ぜいたくな暮しを楽しんでいました。ところが反対にラザロと言う貧乏人は身体全部に腫物がただれて何も出来ずに、いつも金持の門前に寝ていました。そしてせめて金持の食卓から捨てられたものでお腹を満されたいと思っていました。ところがしばらくしてラザロは死んで、天使につれられてアブラハムのふところに移されました。金持も死んで葬られました。金持は地獄で苦しみながら、目を上げて遙るかにアブラハムとそのふところにいるラザロを見ました。そして叫んで言いました。御先祖アブラハムさま、わたしをあわれんで下さい、どうかラザロをつかわしてその指の先でも水につけて、わたしの舌を冷やさせて下さい、私はこの火の中で苦しんでいます。しかしアブラハムは言いました。だが思い出してごらんなさい。お前は生前さいわいを十分に受けたがラザロは苦しみばかりしてすごしました。今彼はなぐさめられているが、お前は苦しんでいる。それだけではなく、我々とお前との間には大きな裂け目があって、こちらからそちらへ行こうと思っても行けないし、そちらからこちらに来ようとしても来られないのだ。すると彼が言いました。ではお願いです。アブラハムさま、ラザロを私の父の家にやって、そこにいるわたしの五人の兄弟に、こんな苦しい所に来ないように証しをさせて下さい。しかしアブラハムは言いました。彼らに

てさえ、にくしみを持つことが非常に大きな罪なのです。何故ならば、それは、すべての人を愛して悪魔より救い、悔い改めに導こうという神様の御心に反することなのですから。自らはいくら清い生活をしても、愛することを忘れたら悪魔に負けたことなのです。

堀江　清

キリストにならいなさい

―――六月二十五日―――

聖書　あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となれ。　ルカ六・三六

このごろは西部劇ブームだと言われます。映画でも、テレビでも西部劇だと、とても人気があるようです。みなさんも、きっと好きでしょう。見ていてたしかにおもしろいものです。西部劇には必ずといってよいほど、悪人が出て参ります。そして大暴れに暴れて、善良な人たちを苦しめます。観客は見ていてハラハラさせられます。「あいつは悪い奴だ、憎らしい奴だ、何とかならないものか」と思っていると、二丁拳銃の名手が颯爽と登場、悪人たちと激しい撃ち合いを展開、ついに悪人が倒されて、一巻の終りという具合です。手に汗して見ていた観客は思わずホッとして拍手喝采というわけです。西部劇と言えば、どれもこれもこういった筋書のようですが、少しもあきられずに、西部劇は町に氾濫するばかりです。

これほど西部劇に人気が集まるのには何かわけがありそうです。西部劇には「なぐられたらなぐり返せ」という、人間だれもが生れつき持っている生き方が、実にうまく表現されていますが、そこに一つの理由があるように思われます。私たちの心の中には、なぐられたらなぐり返せという復讐心が巣喰っています。なぐられたままで、なぐり返さない等ということはとても考えられないのです。なぐり返さない等ということは、馬鹿でない限り、私たちには出来ないのです。それどころか、悪口をいわれただけでも、腹を立てて、もっと口きたなく相手をののしるというのが私たちなのです。

けれども、私たちの師であるイエスさまは、私たち人間の生き方とは全く違ったことを、私たちに教えて下さいました。「人をさばくな……人を罪に定めるな……ゆるしてやれ……与えよ……。」「あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となれ」と。神様のように―しなさい、というのです。すなわち、私たちの生活、行為を神様の規準にあわせなさいという教えなのです。今まで、私たちは人がこうするから自分もこうしてやれ、というやり方で、私たちの行為はいつも人に左右されていました。しかし、人のやり方をお互いがまねていると、それはちょうど、盲人が盲人の手引をしているようなもので、ふたりとも穴に落ち込んでしまうのです。私たちがお互いあなただからこうだからと言って仕返しをし合っていると、世界中が血みどろの戦いをいつまでも続けて行かなくてはなりません。だから、私たちは人のやり方に歩調を合せてはならないのです。いつも、神様の慈悲深い愛に私たちの生活の歩調を合せて行かなくてはなりません。神様はイエスさまを通して、人をさばくことを少しもなさらず、かえってゆるして、罪に定めることをなさらず、生命を与えて下さったのです。私たちはこのような深いあわれみを受けています。私たちも人に対していつも深いあわれみをもつ者となりましょう。

福本秀盛

命をおすてになられました。イエスさまは、私たちをごらんになり、「捨テルニシノビズ、死ヲ決シタ」のです。そのことにより、私たちは、愛というものを知り、神さまが、どんなに、私たちのことを愛されているかを知ることができたのです。

それで、ヨハネはこのように申しています。

「主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それ故にわたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである」

私たちはイエスさまのこの大きな愛によって生かされていることをいつもおぼえ、その愛にふさわしい人間になりたいことです。

江口武憲

— 六月十八日 —

悪魔の誘いにのらないように

聖書　身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを、求めて歩き回っている。

とんがった顔に二本の角、両手両足にはするどい爪が伸び全身真黒な気味の悪い動物?。これは空想の悪魔に過ぎません。けれども悪魔は本当に居るのです。神様が私達の肉眼では見えないように、悪魔も又、目で見ることのできるものではありません。神様が私達の心を通してお導き下さるように、悪魔も又、そのまねをして、人間の心にくい込んで、人々の心を、少しでも神様から遠ざけようとやっきになっているのです。

私達が良くない考を起こす時、これは悪魔の誘惑です。けれども皆さんは、どろぼうをしようとか、人をだまそうなんて考えることはないでしょう。なぜって、このような誘惑なら、すぐとそれが悪魔の誘惑であることに皆さんは気付いてしまうでしょうから。そこで悪魔はずるい事を考えます。先ず悪魔が人間をねらう時、真先にやることは、その人が神様を知らないようにする事です。神様を知らなければその人は自然に神様から離れていってしまいます。人喰人種なんぞはその例です。人を殺すことが悪いとは知らないのです。

ルカ伝十五章一節から十章までを読んで下さい。この中にある失われた銅貨のたとえはこの様な人を指すのです。

悪魔は又、神様を知ってはいても、すっかりまだ頼り切っていない信仰の弱い人に対しては、いろいろな理屈を並べて、その人が神様を信じたくなるか、又は、神様のいましめにそむくように仕向けます。この様な誘惑に負けた人が、同じくルカ伝十五章の迷える羊のようなものなのです。ところが私達の最も警戒を要することは、自分では神様を信じ、神様のいましめをよく守り、いつも清い生活を送っていると思っている人に対して、悪魔は、妙な手を使って罪を犯させようと仕向けて来るのです。それは神様を知らない人、神様のいましめを守らない人、いわば正しくないことをしている人達は、神様のお恵みにはあづかれない人ときめてしまったり、軽蔑をしたり、又、にくんだりするように私達をさせようとするのです。

皆さん方も新聞やラジオで、人殺しや、強盗のことを知るたびに、その人達に対して強いにくしみを感じたことはありませんか。

罪はたしかに、にくむべきでありますけれども、しかし罪を犯した人に対しては、にくむどころか、むしろ罪を犯さねばならぬような弱さに同情すると共に、その人達が悔い改めて神様に帰るよう祈る心がまえを持つことが大切なのであります。いかなる罪人に対し

が、科学の進歩、唯物主義の波は、同じように人間をごうまんにし、精神的な問題に考えをいたすことを忘れ、信仰に無頓着になり、反宗教的にしている。ここで大切な問題点は、金持ちである。ブルジュアであるということでなく、神を恐れないごうまんな人間性がここに露呈されているということである。

この金持と対照的に示されているのは、最もみじめな貧乏人のラザロである。貧乏であるということは、決してよいことではない。金持ちが幸福である、うらやましいというのなら、この貧乏人より不幸なものはあるまい。しかし貧乏であるということにも、大切な幸福をつかむチャンスは残されている。むろんそれは物質的な幸福ではなくて、美しい心を持つことができる、ということである。

イエスさまは、貧しい者は幸いである、といわれた。これは決してやせ我慢や皮肉ではない。貧しい者は、物質を当てにしたり、頼ったりすることがない。貧しい者は、他人の愛情を知り、これに感謝することが深い。貧しい者は、心と心のつながりを知っている。物質慾や、名誉心や、人を見くだすようなごうまんさを持つ必要がないから、いつもさっぱりしていて、自分というものをよく知り、精神的な面の尊さを知っている。だから貧しい者は神を見ることができるし、永遠の喜びを発見することもできる。

ラザロは、死んだ時、み使に連れられてアブラハムのふところに送られたとあるから、物質的には極貧であったが、精神的には最も豊かであり、富んでいたことが想像される。

だから、来世においては、この世と価値が転倒し、この世で幸福の絶頂にあるように見えていた金持ちが、実は本当の幸福は少しも得ていなくて、精神的には最も貧しい者であったことが暴露されたのである。

物質的な幸福と精神的な幸福とをごっちゃに考える人なら、この話を、因果応報ととるかも知れない。しかし聖書においては、心の喜びや幸福だけしか見ていないから、ここに教えられていることがらは、決して因果応報ではないことが明瞭である。物質的に見れば金持ちであったことは、来世においては、何の価値にもならないだけであって、金持ちが幸福なのではない。むしろ精神的に言えば、現世においては、このような金持ちは、精神的には貧困であり、苦しみは必ずこの男の心にわだかまっていたに違いないし、魂の平和を金で購っていたとは考えられない。

ラザロは、貧しさの中にあっても、心のうちに喜びを持っていたから、少しも不幸であると考えていなかったはずであり、それはそのまま来世にまで持ち越されているだけである。

つまり悲劇は、来世にまで持ち越されない物質だけを相手にして生活していたことに、その原因があるのではないか。

金持ちが絶望の中にあって、五人の兄弟の救いを願っているのもうなずける。しかし救いは、そんなことから来るのではなくて、現世において、神のみ言葉に耳をかたむけ、これに従うこと以外にないことを、主は示しておられる。

—三一節第二主日　六月一一日—

悔い改めのすすめ

主日の主旨　ここでは、積極的な神の愛が示される。人間が求めるより先きに、神の愛のみ手はのべられていて、人間はその愛を受けるか、受けないかの選択をせまられている。そのことは、日課の

礼拝説教



三一節第一主日

悔い改めの必要

六月四日

主日の主旨 これから始まる教会暦の日課では、教会の教えとして、聖書の教訓や譬え話等が取り扱われる。この第一主日の日課の主題は、神の愛と人間の愛である。人間は目前のことにだけ心を奪われて、大きな神のみ手、神の愛のふところに気がつかないことが多い。神は人間を愛し、人間に永遠の生命をもそなえていて下さるが、人間はどたん場に来るまではそれに気がつかず、自分の欲望のままに、一時的なこの世のものを愛して、滅亡に突進しているのが現実である。悔い改め、ここから神への愛と信仰が始まる。

主題「ラザロの後悔」

使徒書　第一ヨハネ四・一六―二一
福音書　ルカ一六・一九―三一

祈り より頼む者の力であられる神さま、私どもの祈りを聞き入れ、生まれながら弱く、あなたを離れてはよいことを行うことのできない私どもを、み恵みをもって助け、御戒めを守り、私どもの意志も、行為も、すべてあなたを喜ばせまつるよう、導いて下さい。世々限りなく生きておおさめになる、み子、私たちの主イエス・キリストによってお願いします。　アーメン

説教

人間は目の前にあるものには、すぐに手を出すが、目に見えないもの、ずっと先のこと、永遠につながることには、なかなか心を配ることをしないし、たいてい無頓着で、忘れている。たしかに十年先のことよりも、今の飢えをどうするかということが切実な問題であるけれど、ただそれだけに生きているなら、本能だけで生きている動物と、余り変わらない。いや動物だって、蟻や蜂なら、切な的なことだけでなく、来るべき冬のために、ちゃんと備えをしている。人間が動物と違っているのは、神のかたちに作られたものであり、良心を与えられ、善悪を知る力を持ち、神を信じることができて、神のめぐみ、神の愛を知り、そこから現実を正しく見ることができる力を与えられているところにある。しかし、どうしてその人間が、どうかすると目前のことで一杯で、永遠のことに無頓着なのであろうか。どうやらこれは、人間の弱さ、人間のごうまん、利己主義に起因しているようである。

福音書にあるラザロの話は、いろんなことを教えてくれる。

まずここに美しい衣を着た金持ちが登場する。美しい衣、ぜいたくな食物、遊びのような暮し、これらは人間を最も物質主義にはしらせるものであり、金があればなんでも出来るというごうまんさを植えつけるものである。今日では、このような遊び人はなくなった

が辞退の理由であった。土地を購入し、家を建てるというのは、人間生活の根拠になるものであるから、たしかに大切なものである。土地を見に行くぐらいならいつだっていい、晩餐はきまったわずかの時間だから、それぐらいのやりくりはできるのではないか、という人があるかもしれない。しかしあるいはこの人は、その時間に約束していたのが、どうしてもやりくりができなかったのかも知れない。いずれにしても、晩餐をことわったというのは、この人の自由意志で、彼は目前の自分の利益を選んだのである。

第二の人は、五対の牛を買ったので、それを見に行くから、というのが、その理由であった。これはなかなか大きな財産であって、そのことのために夢中になっている金持の心理状態は、よくわかるようである。富める百姓のように、この牛の所有者は、魂の問題、愛の問題、信仰の問題に心を配るだけの余裕を持ちあわせていなかった。学生の頃、教会学校によくきており、青年会で中心になって働いていた青年が、就職して仕事をはじめると、ついお金になる仕事に熱中して、教会から遠ざかるのも、同じような心のうごきであろう。人はパンがなければ生きて行かれないのは真理だ。しかしパンだけで生きるのでないことも、真理である。ところがそれでは何かということになると、多くの人々は、そのことに無頓着であって、深く考えようとしない。

第三の人は、結婚が理由であった。これはさもありなんと思われる。しかし人間は何のために結婚するのか、結婚によって、生活はどうなって行くのか、等々を考えるなら、この人は大きな問題を忘れているのではないか。

あらゆるこの世の生活は、その根底に神の愛があり、み手があるときにそれが真実になる。まず神のめぐみを受けることがなければ、その他の一切に無益である。人間には選択の自由がある。これは人生を大きく決定するものである。

道傍にいた貧乏人、不具者等が、この晩餐に連れて行かれ、その恵みにあずかり、感激することができたのは、まことに皮肉である。

三一節第三主日　「悔い改の性質」　六月一八日

主日の主旨　人間が悔い改めるのは、どうしたところからでてくるか。神の愛、神の守りは人間の求める先に、すでに与えられているものであって、たとえ苦境に悩み、さ迷い出ても、神の愛は変らないものであることを教えるのが、この主日の主題である。悔い改めというものは、人間の心の働きではあるが、人間が自分の力だけで努力して到達するものではなく、そこには神の愛のみ手が先行していることを知るのが大切である。信仰は人間の努力のように考え勝ちであるが、ルターがいったように、信仰は神のたまものである、ということは大切な点である。

主題　「失われた人間の姿」

使徒書　第一ペテロ　五・六—一一
福音書　ルカ　一五・一—一〇

祈り　神さま、あなたはあなたにより頼むすべての者を守られる方であり、あなたを離れては、強い者も聖なる者もあり得ません。どうか私たちの上に、あなたの憐みを増し加え、私ども

福音書のテキストのたとえ話が、説明するより以上によく説明している。第一主日からの関連において取り扱うようにしたい。

主題　神の愛のみ手

使徒書　第一ヨハネ三・一三―一八
福音書　ルカ　一四・一六―二四

祈り　主を愛し、かしこみ、恐れる者をはぐくみ、いつも誤ることなく助け守りたもう神さま、あなたの聖なるみ名を、絶えずかしこみ愛する者として下さい。世に限りなく生きておおさめになるみ子、私たちの主イエス・キリストによってお祈り致します。　アーメン

説教

隣り近所の友人や知人を、食事に招いたり、招かれたりすることは、楽しいことであり、美しいことである。しかし人間同士の場合には、損得のつきまとうことが多い。

「あの人にお世話になったから、一度食事にお招きしよう」

「あの人と仲なおりをしたいから、いっぱい飲もうじゃないか」

「これから子供がお世話になるから、食事をいっしょにしよう」

「この前お隣りでよばれたから、今度はこちらでよんであげなくては」

たしかに食事の席は、人間の心をやわらげ、交わりを深める、楽しいものであるが、人間はすぐそのよさを利用しようとする。悪いことでは決してないが、もう少し食卓をかこむことの楽しさを、無心で味わうことも必要ではないか。御馳走になって、すぐにお返えしをしなければならないという重荷を感じたり、こんなまずいものをと、けちをつけたりしないで、その主人の好意を喜んで受けるような気持を持つことが大切なのではないか。

イエスさまが、神の愛を晩餐に譬えられたのは、なかなか深い意味がある。晩餐は楽しいものであるが、神の愛は人間の愛と違って「……だから」、というような条件づきのものではないので、この晩餐には、どのようなヒモもついてはいなかった。神の愛は、報いを求める愛ではなく、人間を救おうとする積極的な愛である。人間なら、この人は美人で心がやさしいから、愛してやろう、あの人は心がひねくれていて、いじわるだし、顔立ちだってチンがくしゃみしたような、不愉快な顔をしているから、愛するなんてとんでもない、お付き合いもまっぴらだ、ということになる。

しかし親が子供を愛する場合は、すこし違う。もし子供が不具者であったり、知能の発育がおくれて、白痴であったりすれば、ますます子供がふびんになり、これを可愛いがる。そうした子供を養てるために、仕事を放てきした夫婦まである。他人なら、あんな子供を養ってみても、どうなるものでもあるまいし、と考えるかも知れないが、親の愛は、子供のためなら、どんなことでもして、すこしもそれで悔いることはない。

神の愛は、更に大きくて、徹底している。罪を犯して滅びて行くような人間を愛して、なんとかしてこれを救おうとみ子キリストを地上に下し、十字架の苦しみまでなめて、その罪のあがないをして下さった。この愛を、晩餐にたとえられたのは、それが神の積極的な、すばらしいめぐみであることを示すためであろう。

ところが、こうした神の大きなめぐみにもかかわらず、せっかくの招待をことわった人がある。

第一の人は、土地を買ったので、それを見に行くから、というの

れた人間は、ひきかえそうとあせればあせる程、深みに落ち込むものであって、実際は何も出来ない銀貨のようなものである。救いは自分で求めるものではなくて、神の救いの手を待つ他はないものである。

第三は、失われたものが見出された時の喜びである。残された九十九匹も、残された九枚の銀貨も大切なものであるが、それにもまして尊いものは、失われた一匹または一枚が、無事に助け出されたことであった。それは失われた者の方が尊いのではなくて、羊や銀貨に対する羊飼いや女の愛は同じである。しかし失われたということに対しては、深い心のいたみがあるし、失われた者は、残された者にまさって、自分のためにそそがれている愛をしっかりつかむことが出来たはずである。自分のみじめな姿に気付いて、神の愛、神のめぐみを深く受けとめることの出来る者こそ、恵まれた者であるといわなければならない。私たちは、神の愛のみ手をしっかり見て行かなければならない。

三一節第四主日　六月二五日

悔い改めた者の生活

主日の主旨　人間はわざによって救われることはないが、救われた者も、人間的な弱さを多分に持っているから、しなければならないわざが、いろいろ要求されている。この主日においては、キリストを信ずる者が要求されているつとめについて学ぶことになっている。それは、忍耐であり、愛のわざであり、反省であり、謙そんである。

主題　信ずる者のつとめ

使徒書　ローマ八・一八—二三
福音書　ルカ　六・三六—四二

祈り　主よ、どうかあなたのご支配により、この世が安らかにおさまり、あなたの教会は、あなたの平安の中に、喜びをもってあなたに仕えるものとさせて下さい。救い主、イエス・キリストによってお祈ります。　アーメン

説　教

宗教改革の時に問題になった一つのことは、人間は自分で善い行いができ、それによって救われるということに対して、そうではない、人間は罪人であって、自分の力や行いではどうすることもできないものである。救われるのは神さまのめぐみによるのであり、キリストのあがないのわざによるのである、ということであった。たしかに、前の日曜日に学んだように、人間は迷える羊のようなものであり、失われた銀貨のようなみじめで無力なものであって、神のめぐみのみ手に捕えられるのを待つほかはないものである。

けれども、神のめぐみのみ手によって捕えられ、キリストの十字架のあがないによって新しく生れかわり、救いを得た者は、そののちも、神さまのめぐみだけを頼りにして、銀貨のように、じっとしていてもよいのであろうか。

失われた羊は、助けられたら、また群れの一匹として果さなければならない任務があるし、ことに銀貨は、拾い出されたら、首かざりとして、婦人の胸を美しくする役目があるわけであり、銀貨としても、それだけの価値を発揮しなければならない。

の司、また導き手となって下さい。私たちがとこしえのものを失わないで、この世を過ごし得ますように。救い主イエス・キリストによってお願い致します。　アーメン

説教

ここに二つの有名な譬え話がある。

一つは、百匹の羊のうち、一匹が迷い出たのを、羊飼いが苦心さんたんして捜し求め、ついに発見して喜んだ話であり、一つは、女の持っていた十枚の銀貨のうち一枚がなくなったので、女は家中捜しまわり、ついに発見して喜んだ話である。話の内容は若干違っているけれど、ここにいくつかの共通点があって、それをしらべてみれば、この二つの譬え話の目的が、明らかになるであろう。

まず第一は、羊飼いと銀貨の持主である女である。この二人は、どちらも一番大切にしているもののうちの一つを見失って、大いに心痛し、万難を排してそれを捜し求めている。ある聖書注解者によると、この十枚の銀貨は、女の首かざりではなかったか、と言っている。そうだとすれば、女にとってはまことに貴重なものであり、その上、十枚のうち一枚がなくなれば、首かざりとしての価値がなくなるかも知れない。だから、たった一枚だとしても、その価値は十枚全部あわせたものに等しいのではないか。羊飼いの場合は、もっと深刻である。羊飼いと羊の関係は、聖書にしばしば引用されているように、そこには愛情を媒介にした深い心の交わりがある。善い羊飼いは、羊を猛獣から救い出すためには、生命をも捨てると言われている。だから、例え百分の一にあたる一匹であっても、行方不明となったならば、九十九匹はそのままにしておいて、あらゆる犠牲を払って救出に当る。それは大きな愛の現われであろう。

そこにある共同のものは、だれから頼まれたわけでもないが、その愛のゆえに、積極的に助けの手をのばしていることである。ヨハネは、「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、み子をおつかわしになった。ここに愛がある」（第一ヨハネ四・一〇）「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである」（第一ヨハネ四・一九）、と言っている。神がまず世界を創造し、人間を作り、人間の心のすべてを知って、求める先にすでに私たちを愛し、そのみ手をのばしていて下さるという事実、人間が神を求める先に、神はすでに人間を求めていて下さるという事実、ここに信仰の第一歩がある。

第二は、迷った羊も、一枚の銀貨も、失われた状態にあったということである。羊はどのようにして、迷い出たのであろうか。きっとおいしい草を喰べているうちに、いつとはなしに草のある方へ行ってしまって、群れを見失い、道を迷ったものであろう。気がついた時には不安と焦慮につつまれて、どうしようもなくなっている。人間は目前のことに心を奪われていると、気がついてみると、にっちもさっちも行かないようなことになっているものである。迷った羊の自覚と反省が、迷わなければなされないというのは残念であるが、迷っている自己を、はっきり認めることこそ、神の愛を受ける最初の条件であるといわなければならない。

銀貨の場合は、もっと徹底している。羊なら、自分の状態を自覚すると、うろたえてもと来た道を捜しまわることであろうが、銀貨は生きものではないから、コロコロと転って持ち主の目の前から姿をかくしてしまえば、持ち主が捜し出してくれるまでは、いつまでもそのままに静かにしていなければならない。ところが失われた人間の姿は、羊よりもむしろ銀貨の方がよく実状を示している。失わ

聖書研究のための
毎週の教案

使徒たちと議会
（サンヘドリン）

使徒 四・一—三一
同 五・一七—四二



一 「主が救われる者を日々仲間に加えて下さる」（二・四七）事により使徒たちの交わりは教団として次第に成長していった。行伝三章に誌されている驚くべき出来事の後で、この奇跡のもたらす「救」の本義を、復活を焦点にしてペテロが話している間に、この不穏の状況に不安を感じた神殿の当局者たちは、ついに使徒たちに干渉し始めた。問題は暴動への懸念と特に「イエス自身に起った死人の復活」（四・二）は、信仰上の立場から、サドカイ人たちにとって許すべからざる説教内容であった。「気をいら立て」とルカが誌している事は、この間の消息を物語り得て余りあるものという事ができるであろう。彼らは両人を捕え、時既に夕刻であった為か、一晩留置所に入れる。翌日緊急に召集された最高会議の議員たちの議席の前に立たせて「あなたがたのような人間が、一体何の権威又だれの名によってこのことをしたのか」と、足なえの立たしめられた救の奇跡につき尋問を開始する。ここで喚問の動機が暴動への慮りとしての政治的のものと、復活に関する信仰上のものと、二つの事柄を含んでいるのに、質問の焦点が、使徒たちの中心的主張であり、福音の本質である後者を論破しようという態度が現われていない事は大いに注意する必要があろう。その回答はペテロの証言の内に余す事なく示されている。

二 ペテロは聖霊により霊感を受けし言葉を以て答える。前半のひびきの中に、彼らの喚問の動機を見抜き、さらには奇跡の起こさしめた大いなる事柄、すなわち復活し給いしイエス・キリストの名への驚きと又懐疑、又否定という複雑な統一なき心情をみ、大胆にキリストの復活によってもたらされし救の業の力によって、この事が起ったのだと主張する。事柄は飽くまで、足なえの「救」（σωτηρία）に違いないが、それは、罪よりの、やがて到来する「審判よりの救」である。この救の主張の中には、イエス・キリストの名を信ずる事への積極さの要請と、これを拒否する事は唯単なる否定に止る事なく永遠の滅亡に陥入る事だという強い宣言とがかくされていた。この事件は、基督教団とユダヤ教団との始めての接触であった。二つの教団の指導者たちの間に聖霊の導きをめぐって示される二つの異った態度が明瞭に示されている事は興味ある事柄である。

使徒たちの語る態度は卒直で大胆であった。そして彼らに感動すら与えた。無学な田舎人が、なぜ高度な神学論争をなし得たのであろうか。議員たちは「彼らがイエスと共にいた者であることを認め」（四・一三）ているが、一体何をそこに認め（ἐπιγινώσκον）たのだろう。それは第一にイエスにあった権威を彼からの賜として使徒たちも有しているという事である。最後のメシヤ証言の一つである詩篇一一八・二二の引用（それは又イエスが用いられたものであったが—マタイ二一・四二以下、ルカ二〇・一七以下）。それは救贖史における聖書の予言理解である。そして更に自己の説を確証するに、常に根本原理に立ち帰って、支葉末節によって掲げ足を取

救われた者も同じである。なんの役にも立たないと思われていた罪人が、救い出されて、真の人間として神のみ旨を地上に行って行く使命を果すために生まれかわったのだから、こんどはしなければならない善いわざがいっぱいある。

ヤコブは「自分には信仰があると称していても、もし行いがなかったら、なんの役に立つか」（ヤコブ二・一四）と言っている。たしかに、もし怠け者であれば、その信仰も、だんだん冷えて行くかも知れない。島崎藤村が「心を起こそうと思うなら、まずからだを起さなければならない」と言った。たしかになまけて横になって無精をかまえたままで、じっとしていたら、どんなに立派な心を持とうと思っても、どうにもならない。

だから神のめぐみにあずかっているものは、信仰のない者にまさって立派な生活をし、いつもはげんで、積極的な信仰生活の実践を進めて行かなければならない。

イエスは、マタイ福音書五―六章にあるように、山上の垂訓で、実に貴重な信仰の実際生活をお教えになった。トルストイ等は、これが聖書の中で一番貴いもののように教えたので、これがキリスト教の中心であり、これを守ってさえおれば、立派なクリスチャンと言えるのだと考える人が出てきた。もちろんキリスト教の中心は、キリストの十字架の福音であって、どんなによい行いをしても、十字架の福音が抜き去られておれば、それはキリスト教とは言えないが、この福音によって新しくされた者は、この貴重な山上のキリストの教えを実行することによって、クリスチャンとしての立派さを現わすことができるのである。

今日の日課には、まことに弱い人間に痛いことが、さとされている。イエスは次のようなことを言っておられる。

「人をさばくな」―わたしたちは、すぐ、人の悪口を言ったり、人を批評したりする。クリスチャンと言われる人が、案外自分は立派な人間なのだと思いこむせいか、しばしば人のことをあれこれ言って、非難をする。いったいわたしたちには、そんな資格があるのであろうか。

「人を罪に定めるな、ゆるしてやれ」――これも大切なことである。人を罪に定めたり、罰したりするのは、神さまのなさることではあるまいか。神のめぐみ、キリストのゆるしを受けているものなら、ゆるすことはあたりまえである。

「与えよ」――私たちは、すべてのものは神さまから与えられたものであることを知っていながら、さも自分の力で獲得したり、することができたりするものであるかのように、ふるまって、人に与えようとしない。貧しい人、苦しい人々を助けることにも、なかなか思い切って乗りだすことが出来ない。与える、あるいはさらにすすんで、捧げる、これはクリスチャンの一番大切な心がまえではあるまいか。

「盲人は盲人の手引ができようか」――わたしたちは、ちょっとできると、なんでもできるように高慢になる。自分も盲目のくせに、さも目があいているかのようにして、人を導こうとする。わたしたちは、もっと謙そんにならなくてはならない。

「兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にあるちりを認めないのか」――自分の目にあるちりを知ること、これがおろそかにされていたら、怠け者の信者よりも、もっと悪質の信者だと言えるであろう。反省、ざんげ、自覚、これは信者の出発点であり、同時にいつもいつも繰り返えしなされなければならない、クリスチャンの大切なつとめである。

は、教会に内在し給う聖霊の臨在の事実であり、この事実の厳粛な実際的意味である」（ブルース）。この観点この物語を学ぼう。

二　もしも無意識につけられた名前であったら、それは余りにも不幸な事であり意識的につけられたのであるなら、禍いてある。アナニヤとはハナニヤ（旧約の）、すなわち「エホバは恵み深くい給う」であり、サッピラとはアラム語のシャッピラ「美しい」を意味するからである。さてこの両人は「共に資産を売ったが、共謀して、その代金をごまかし、一部だけを持って来て、使徒たちの足もとに置いた」（五・一、二）。こういった行為の中に一部を以て自己の資産の全部であると申し出でた事が察せられる。ペテロの叱責の言葉の中に、十分この事はくみとれる。確かに一部にせよ献財されている事は正しい行為に違いない。しかしこの誤魔化し、また教会への欺きは、今日の私たちにも通じる或る心理を表明しているように思われる。すなわちその欺きは神へのという献財が、自己の行為を中心に行われているという事である。これは聞いた話だが、ある教会の執事で、特別に教会に大人の献金をなしている人があった。所が結果は、世俗の金権中心の考え方が、そのまま教会に持ちこまれ、その人は執事としてあるばかりでなく、長老格として信徒により一段と尊敬を得てしまう事により、その人の自己自身に対する厳しい信仰の修練は、結果として失われ、信仰が子孫に伝えられないばかりか、教会はその人の死に際し教会葬を以てなしたが、その家族又親族はその後、代るに仏式を以てなしたという。あまつさえよき教会の奉仕者であった子供は、別の現世的な宗教に走るという始末になったという。この話はアナニヤの物語と並べて考えると、教会における二つの大きな誤りを示唆していると思う。アナニヤは、自分の評判、たくさんの献財をなした事により人々からの尊敬を得ようとする期待があったのではあるまいか。信仰に生きる教団への躓きであり、信仰への欺きである。積極的な欺きであるなら、筆者が提出した話は消極的な欺きである。信仰の純粋さ、その善と美を己れの為に利せんとする世俗主義である。此の世の傾向が、そのまま教会に持ちこまれる。ペテロはこの一点にその瞳をこらしたのだ。一部だけを持って来た事に問題があるのではない。教会への欺きは、教会に生きる聖霊の欺きであり、「神を欺く」事になる。神への欺きは最大の神に対する罪である。「罪の支払う報酬は死である（ロマ六・二三）」ペテロの叱責の鋭さの中に使徒たちの、師イエスの「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである」（マタイ・八・二〇）という言葉を、今や深く信じ、かつ自分たちの唯中に聖霊が臨在し、且つ権威を以て働いている事の如実な体験がひびいているのを見る。アナニヤは此のペテロの激しい言葉をうけるやいなや、倒れて息が絶えた。「三時間ばかり立ってから「サッピラは夫の死を知らずにはいって来た。ペテロはそこで真実を語る機会を彼女に与えんとして「あの地所は、これこれの値段で売ったのか。そのとおりか」と問う。所が彼女はどこまでもしらを切る。いわば夫の偽りの繰返しである。「あなたかたふたりが、心を合わせて主のみ霊を試みるとは。」このペテロの言葉の中に、彼が既にこの悲劇の本質を、鋭く見抜いているのを知る事が出来よう。アナニヤの死とは、教会を偽り、教会の中に働く聖霊を欺く事が、否、企てそのものが、実は神の審判の厳しい結果なのだという事を語っている。妻の罪は神の忍耐へのつけ上りである。人間は「神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていること」（Ｉコリ三・一六）への怖れとおののきを味う、この純真と謙虚さを、もしこの両人が味っていたら、欺きの企ては、しなかったであろう。筆者は幼き日に日曜学校で学んだ、全てを知り給う神と、審き主の業を思い、身にはげしい戦慄を覚える。罪の自覚は審判への戦慄である。同時にこの身を赦し、救への約束を与え給う神の愛に、又異った戦慄を覚える。これこそ、今生き、働き

られない能力、それがイエスにあっては権威ある業を伴ってなされたが、今や同じ業が弟子たるこの使徒たちにも与えられているという事実、それをこの足なえの愈やされし歳四〇の男に見た。それが復活せる主イエス・キリストの名によってなされたものであるという主張を否定も又論駁も、いや質問することすらできなかった大きな原因であった。福音の宣伝は、そこに聖霊の強く働く時、その絶大な権威の故に、一般の人々には矛盾、不条理とみえ、且つ躓きでありこれ破るれば、その足場をすら失わしむるであろう事柄にすら接近せしめる努力を有するのである。私たちは真の復活の証人としてこの働きを、今信じているか。

三　五章に移ると、再び投獄と尋問とが議会において行われる。そこで具体的な主の導きと、それによって立つ証人としての使徒の姿が明瞭に誌されている。まず獄に捕われの身の際、主の使が獄の戸を開き彼らに「この命の言葉を漏れなく、人々に語りなさい」（五・二〇）と命じている。これは足なえの立ちし事柄と直接関係している。すなわちイエス・キリストは「いのちの（救の hayye）君」である。従って、それは病の救いと、罪よりの救いとしての、永遠の生命の約束をこそ、福音の中心、本義として語るべき事の勧告と励ましとである。次に、議会に対し開口一番ペテロは「人間に従うよりは、神に従うべきである」（五・二九）と宣言する。彼らが一介の漁夫としてガリラヤ湖畔に住める際には、議会の持つ権威は、彼らを「アム・ハー・アーレツ」と萎縮せしめる程の、圧倒的な権威を持つものであったが、しかし今、よきおとずれを宣べ伝えることを、その任務と課せられし彼らにあってはそれを与え給う神の権威は更に絶大であり、偉大であり、その萎縮感より開放して、大胆な証言者として立たしめている。第三に、その証人たる事は「神がご自身に従う者に賜わった聖霊もまたその証人一である事の指導の下になされている。「わたしたちは、これらの（ペテロ）の言葉（五・二九以下）によって、使徒的団体が、聖霊の表現器官となってしまうほどに、聖霊によってとらえられ、住まわれているという意識をもっていたことを、またも注目」すべきであろう（ブルース）。（ヨハネ一五・二六、二七参照）第四に、この攻撃、迫害こそが、事は端的に福音の偉大な威力を人々に示す、最大の証しとなったという事である。私たちは国家的権威の前に立って、このように聖霊の指導による証人としての大胆さを、その復活信仰にかけて持っているであろうか。

神を欺いたアナニヤたち

使徒　五・一―一一



一　救の確信なき罪の意識は、ひるがえって他人の罪を断ぜねば置かぬ心情に走らしめる。初代教会を余りに理想化し、且つそこにあった一致と清らかさ（特に二・四二以下、四・三二以下）に就いて過大に評価すると、現代の教会に絶望するか、或は批判ばかり先立って、独り己れを善しとする誤れる教会観が生れ勝ちとなる。私たちはここに与えられたアナニヤとその妻サッピラの物語を通し、何の為に、ここに此の記事が記載されたのであるかという、深い行伝の真意を探ぐらねばなるまい。もしそれを怠るなら、唯に教会の理想化への心情を駆り立てるか、又余りにも恐ろしい事柄の故に「救」「愛」に関して疑念を持つばかりで躓き終ってしまうに違いない。

ここで行伝が意図しているのは、「ペテロの性格、アナニヤと妻サッピラのうけた当然の報いでもない。この物語が強調しているの

しかし、この七人がみなギリシャ名である事はヘレニストの群に彼らが属していた事を思わせるに十分である。その中、特にステパノは最初の殉教者となり、ピリポはサマリヤ人を救う絆となり、異邦伝道の先がけをつくった。こういった事を考えると、「七人」であり「ヘレニスト」たちであり、更に信仰のあつく、伝道に耐うる人であった事は、この七人の選出が、教団の運営の為に選ばれたという直接の目的をはなれ、別の使命が、既に「七」の数の中に象徴的に物語られているように思われるのである。七はイエスの五千人のパンの奇跡にも明らかに示されるように、異邦を意味したし、黙示録にいたっては、明白に、異邦教会の象徴的数である。

この七人が選出されると、会衆は彼らを使徒たちの前に立たせた。選んだのは会衆であった。任命したのは使徒たちであった。手を彼らの上において祈った。この按手は、祝福を与える事（創四八・一三以下）であり、後継者の委任の行為である。ここでは一二人の使徒と七人のヘレニストが特別な任務の関係において結び合わされている。エルサレム教会はこの事により、その伝道と、内なる交わりの新な結合がなされたのであった。神は常に人の弱さをかえりみ給う。その弱さが、神の御手にあって、新たな力を持つ。

三 この物語の中で注意したい事は、その結果、教会は次第に成長し、福音の恵に浴する人々が加わったか、祭司たちの加入はどういう結果を教会に与えて行ったろうかという点である。行伝は何も語ってはいない。しかし「信者の多くを僧職階級に結びつける絆が強められることを意味する。……この新運動が旧秩序とあまりにも親密に結びつくことは、よいことではなかった」（ブルース）。

単元　四　教会の発展

設定の理由　ステパノの殉教、それに続く弟子たちの離散。それを足がかりとして行われた、異邦の世界への伝道によって、教会も新しい発展の段階に入る。ユダヤ人の間に生れた教会にとって異邦人への伝道は、まことに困難な問題であった。

目標　そこに神の摂理と、使徒たちの大胆な信仰の決断のあることを明らかにする。教会が聖霊により、障害を乗りこえて形成されて行く神の摂理を学ぶ。

ペテロと異邦人伝道

使徒　一〇・一―一一・一八



一 私共はパウロの偉大な異邦人伝道の姿に目をうばわれて、エルサレム教会の内に働き、異邦伝道への準備の道を開いた聖霊の導きを見すごし勝ちのように思う。又性格の判然としたパウロにでなく、心理の振幅の度合いのはげしいペテロを選んで、その道への幻と、主の道を聞かんとて「神のみまえにまかり出ている」異邦人百卒長コルネリオと周囲の人々を備えて、彼を決断にうながし給うた主の手の導きを深く知りたい。そこに既に主イエス・キリストにあってあった異邦への福音の道すじが、ペテロを通じ、又後のパウロとエルサレム教会との異邦伝道に関しての確執、その際のペテロの動揺を通し、次第に教団の指導者の意識の底に、単なる意識としてでなく観念として、確実な力として大きな伝道のエネルギー、また指標となっていった意義を学ぶべきであろう。

二 時は「教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤ全地方にわたって平安を保ち 基礎がかたまり、主をおそれ聖霊にはげまされて歩み、

給う聖霊のなせる業である。次第に強まりゆく、みせかけの人生たる今日の世界の中で、私たちも又、神よりも人への見せかけの信仰に移りつつある事を強く反省したい。

教会の組織

使徒 六・一―七



一　「禍を転じて福となす」という言葉があるが、そこには現在の己が身の禍を幸福にみせかけようとする心理が多分に働いているように思われる。神の導きの御手は、人の目には無情であり、スキャンダルであり、又逆境のように見えるであろうが、そこに正しい信仰の瞳をすえる時に、思いもかけぬ結末を又新に進むべき使命を明白に示してくれる。六章のこの物語は、教会の新たな行く手が示された事を語ってくれている。それは異邦伝道の準備である。偏狭なユダヤ主義より、キリストの核心であった、異邦の救、すなわちイスラエルの救という Representative Universalism が今や教会の中に生きようとするのである。

二　事の次第はこうであった。エルサレム教会は信徒の数を増すにつれ、ヘブル人（パレスチナ生れのユダヤ人）とヘレニスト（口語訳はギリシャ語を使うユダヤ人としている。T. P. Ferris はむしろ保守的なユダヤ人に対して、ギリシャ的習慣を愛好する人とうけとっているが、むしろそのように理解する方が、当面の問題をより深く解する事が出来るように思う）の両者が共にあった。所がこの文化に対し、又生活様式に対し保守的進歩的の間にある一種の生活感覚から来る相異が、互に緊張を生むようになった。そしてこのような考え方がそのまま教会の内にも持ち込まれてしまった。いつの時代でもそうであるが、救に関して同じ途を進み得ても、事「日々の配給」という共有資金の配分になると、それが、直ちに到来するであろう終末観によっておこなわれた、あの切迫した信仰さえ失われて、唯、焦点が配分の事にのみ目が注がれる。さもしい心情である。この貧しい人々への配分は多分にヘブル人によってのみなされ、そこに他を犠牲にしてのえこひいきが行われていたようだ。ここにヘレニストたちより「自分たちのやもめらが、日々の配給で、おろそかにされがちだと、苦情が申し立て」（六・一）られる結果となったのであった。

使徒たちは、このつまらぬ紛争を避けるために、もっともよい解決の道を選んだ。自分たちが伝道に専念するという使命をさしおいて、教団の財政上のきりもり、監督、又「日々の配給」に当ったりするわけにゆかない。そう解し、会衆を集めこの運営の任に当る人を選出する事を依頼した。条件は「御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人」という事だった。それは今日の言葉でいえば、清廉潔白の人、人々の信頼を得ている人、私欲のない人、更に運営の妙に秀いで、微妙に働く人間感情を考慮にいれ、常に信仰に人々を導き得る人、つまらぬ事を言あげしない人、自分の社会生活の低さから来る劣等感を教会の役職によって心理的に自分を高きに置きかえようとしない人、教会を自分一個の利益の為に用いようとしない人、といった所であろう。教会の正しき成長の為に、人々の集団であればこそ、人の智慧が正しく神の業の為に用いられなければならぬ。十分今日の教会も考えねばならぬ事柄だと思う。ここに宣教、伝道という本来の使命の為に、組織と制度が設置せられなければならないのであろう。そこで既に「信仰と聖霊とに満ちた」七人の人物が選ばれる。七人という数の理由は不明である。

信徒学級

聖霊に導かれる信徒

第一コリント　三・一六、一七



一、聖霊と信徒の生活　私たちをキリスト者とし、信仰の生活を歩ませるものは聖書の働きであることはいまさら言うまでもない。主イエスはニコデモに、「霊から生れる者は霊である」（ヨハネ三・六）と語りたまい、パウロはガラテヤの教会の人々が、「御霊を受け、……御霊で始めたのに」まちがった信仰に走ってしまった事をいきどおっている（ガラテヤ三・二―五）。聖霊によって入信したものは（第一コリント一二・三）、御霊の多くの実を結び（ガラテヤ五・二二）、清い生活へと進んでゆく。信仰の一つの面は神の恵みの先行による義認であり、他の面は聖化であり、信仰の事実を、聖霊の働きの下に私たちが追求してゆくすがたを表わすものとバルトも考えている。義認と聖化はともにキリストにおける賜物であり、切りはなす事をしてはならない。いずれか一方を偏重することは誤りである（エペソ二・八―一〇）。

二、聖化と人間の意志との関係　すでに新約聖書の時代に、パウロがたたかっていた問題は、律法によって、すなわち人間の努力によって信仰とその生活が生れるのではなく、ただ神のキリストにおける恵みのみによるという福音の中心的な事柄であった（ローマ三・二一―二四）。しかし、キリスト教の歴史をかえりみると、この問題は繰り返し起っている。アウグスチヌスとペラギウスの論争もこれである。ペラギウスは教会の腐敗が、あまりに恩恵を説いて、人間の意志の訓練を軽んじた結果であるとし、自力主義を強調した。その動機はよいのであるが、真理をまげることはできない。ペラギウス主義の異端宣告は四一八年、四三一年の教会会議でなされた。一六世紀に人間の道徳的能力を強調したイタリアのソツィニ（一五二五―六二）もペラギウスの流れにあると言えるであろう。これはまたオランダのアルミニウス（一五六〇―一六〇九）によって発展させられ、神の恩恵の絶対性、先行性をあくまでも主張するカルヴィン主義と鋭い対立を見せた。シュライエルマッヘル、リッチュルに対するバルトもこの点から考えられるであろうし、またバルトとブルンナーの決別も同様の観点から見る時に興味深い。

　ともかく、人間の可能性を認めるあまりに、神の恩恵の能力を割引することは誤りであり、信仰とその生活が神の恩恵と人間の能力の合作であるとする事は、これを捨てなければならない。カトリック教会の神人協力主義に対する宗教改革の信仰のみによる救いの再主張は理性の力を重んずる今日も決して忘れ去られてはならない、福音の中心的な事柄である。「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」（ピリピ二・一三）。

次第に信徒の数を増して行」（九・三一）き、ペテロたちの伝道が一つの限界点に来ている状況の時代であった。その足がかりは主として異邦人の都市であったカイザリヤであった。その限界を乗りこえ、ユダヤ人と異邦人の間の障壁をのりこえさせたのは、聖霊の導きに外ならないが、その時に器として用いられた人物はペテロであり、はじめて福音をペテロの口から聞いたのは「正しい人で、神を敬い、ユダヤの全国民に好感を持たれている百卒長コルネリオ」（一〇・二二）の家族とその友人たちであった。ペテロとコルネリオを結びつけたのは神の使いと幻であった。ペテロを決断に導いたのは内なるみ霊であった。

私共はこのコルネリオの物語の中に主として何がこの異邦人伝道の触発点となったかという点に注意を向けよう。異邦社会の私共日本人の福音の接触点という事柄と多少関係する所を示してくれるに違いないから。コルネリオは「ローマ市民の第二イタリヤ部隊」（Cohors II Italica Civium Romanorum）の百卒長である。彼のこの階級からいうと、「堅実な、慎重な精神をもった良い指揮者と同じで、大胆にして且つ冒険的でなく、手に攻勢に出たり戦闘をはじめたりせぬ」勇敢な人物であったであろう。真実な人格の持主であった。そして更に彼は「神を敬う人々」（φοβουμενος τον θεον）の部類に属する異邦人の一人であった。（異邦人の中にはユダヤ教の改宗者が多数いたが、これらの人々は次の三つの儀式を経て入団した。㈠割礼（但し男子に対し）㈡証人の前でのきよめの禊ぎ、㈢犠牲の奉献、従って改宗者には女子が多く、男子はユダヤ教の拘束力の少ない結びつきに満足し、「神を救う人々」と呼ばれていたのである。）それ故、彼らはユダヤ教の真理、特に唯一神教の思想、律法に基づいた倫理生活の規則のきびしさとその真面目さに心ひかれ、会堂の礼拝に出席し、ギリシャ語訳の祈りまた聖書の教えにもかなり親しんで居たものと見うけられる。事実コルネリオは、神に正規の祈りを献げ、且つ安息日の遵守、更にイスラエルの民（ολαος）に施しをなしていて、ユダヤの全国民から好感を持たれていた。この事から或る意味で異邦人でありながらも、駐在武官の領域を越えて、真執なユダヤ教徒の一人として守るべき事柄の全てを満足さすに足る人物であった事がうかがえるのである。この信仰の真執さに神は最初の福音の窓を開き給い、後のパウロの伝道活動によって、教会の群の中心となって行った点は、十分考察せねばならぬ点であると思う。このユダヤ教が与えた異邦社会、また宗教との異質感は、その倫理的な高さと、唯一神の厳しい語りかけによって、異邦宗教のもたらす文化社会との接触、および堕落という事とともに、真実な人々の胸にしみこみつつも、割礼の習慣と、ユダヤ教の選民意識の故に、そこに満たされないものが、その心の内に生まれて来るのは当然であったろう。この心の割れ目に、神の聖霊の御手がとびこんだのである。今日の教会は、この倫理の高潔さを失い始め、観念の世界での独一性の主張が、少し多すぎるのではあるまいか。伝道という境位での異邦社会との接触という事で、私共の接近が、彼らへの接近になりすぎの彼らからの接触に意を用いないきらいがあるように思う。

最後にこの個所から学びたい事は、ペテロが幻の中で見せられた食物の問題を通して、すでに師イエスの言葉の力が、生ける聖霊の具体的な言葉の励ましとなったであろうという点である。（マルコ七・一四以下）。この事は、主の言葉と聖霊の言葉の語りかけという事について問題を提供してくれているように思う。ペテロの胸に潜んだ、いわば忘れかけた主の言葉が、今や困難な問題に直面した時、生ける力となって、彼をうながし、唯単なる祭儀における食物の問題をこえて、異邦への福音の拡大、それはユダヤ主義の放棄を意味する事を学ばせたに違いない。神の準備の何と遠大な事であるか。

聖徒の交わり

第一ヨハネ　一・一—一〇

一、キリストとの交わり　ボンヘッファーの「交わり」という書物（岸千年訳　聖文舎）は、ナチスの迫害の下、地下神学校で彼が二五名の牧師補たちと共同生活をした、その生活から生れた書物である。生命を賭した同信の同志の生活、それにまつわる交わり、ボンヘッファーが、「第一に、キリスト者の兄弟関係は、一つの理想ではなくて、神の現実である。第二に、それは霊的現実であって、心理的現実ではない」と言っているのに注意したい。私たちの交わりは、人間の理想、イデオロギー、行動などで成立するのではなく、私たちを真に結びつける一つの御言葉と御業、すなわち、イエス・キリストにおける罪のゆるしによってのみ、そこに生れるものである。「夢想者の願もやがてきえうせるところ、そこにキリスト教共同体の夜明けがあらわれはじめる」

二、ひとりでいること　ボンヘッファーが「交わり」を説くのに、「ひとりでいることのできない者は、交わりに注意せよ」と言っているのは、ひとつの驚きであり、感銘を受ける言葉である。私たちの信仰は群衆心理につられて生じたものではないはずである。神と我、きびしい我—汝の関係において、ひとつの実存として、私たちは一人びとり神の呼びかけに応じ、そして責任をとったのである。この事のない者に、真の信仰はなく、いわんや真にある交わりは形成できない。言われてみれば、何でもない事であるが、自己から逃避して、あるいはうさばらしのために、あるいは一時の陶酔のために、共同体を求める者の多い現実をみる時に、ひとりでいることを再び確立しなければならない事を痛感させられる。「われわれは、みな、死をもとめられている。たれも他にかわって死にはしない。かえってめいめいが、自身で自分のために死とたたかう。……そのときわたしはあなたのそばにいないし、あなたはわたしのそばにいない」と言ったルターは、同時に、「わたしが死ななければならないなら、わたしは死ぬときひとりではない。わたしが苦しめば、彼ら（教会）が、わたしといっしょにくるしむのである」と言っている。

三、キリストにおいて　さらにボンヘッファーの所説に学んでみよう。(1)キリスト者は、イエス・キリストのために、他者を必要とする。御言葉において、私たちは義と純潔と祝福された喜びをうけるが、ひとりひとり、そのような御言葉にうたれる時、それを他の人に語り、神はこのような証しを求め、望んでおられる。キリスト者は神の言を彼に語ってくれるキリスト者を必要とする。自分でいようとすれば必ず真理をまげることになるからである。(2)キリスト者はキリストを媒介としてのみ、他者に近づく。人間の間には争いがある。エペソ二・一一—二二に明らかなように、仲保者キリストなしに、私たちは兄弟を知らず、兄弟に行くこともできない。道はエゴで閉されているからである。(3)私たちは、キリストにおいて、永遠から選ばれ、時間の中で受けいれられ、永遠に一つにせられる。私たちはキリストの体なる教会の中に召され、受けいれられ、永遠にキリストに属している。自分の兄弟を見る者は、その兄弟が、キリストと永遠に結ばれていることを知るべきである。「キリストもわたしたちを受けいれて下さったように、あなたがたも互に受けいれて、神の栄光をあらわすべきである」（ローマ一五・七）。

四、コイノニア　「新しき教会の生命と使命」（新教新書）の中で、世界教会協議会の総主事ヴィッサー・トーフト博士は、米国改定標準訳が、コイノニア（交わり）を決すのに四つの言葉を用いてい

三、捕えようとして追い求めている

ピリピ三・一二—一七を読もう。義と認められている私たちも、文字通り義人ではない。「義人にして罪人、罪人にして義人」（ルター）という二重性の下にある。ウェスレーは、罪からの全き潔めとしての完全を主張し、そのはげしい追求をなしたが、単に義認されたから聖化が生ずるというのでなく、完全の目標に向かって進むことを私たちは忘れてはならない。アウグスチヌスの言うように、「神は私たちを、在るがままの私たちとしてではなく、なるがままの私たちとしてみたもう」からである。「信仰に始まり信仰に至らせる」（ローマ一・一七）ということも此の意味に解してはどうであろうか。英語の be の信仰生活でなく、become の生活でありたい。

もちろん義認と聖化は、現在における信仰の事実であることにまちがいはない。私たちはすでに福音の下にあり（ガラテヤ三・二五、二六）、聖霊はその保証である（第二コリント 一・二二、五・五）しかし、聖化は私たちにとってなお信仰の事実であり、現実的な事実ではない。聖化はなお終末的現実ではない。信仰の生命はキリストと共に神の中に隠されており、それが栄光の中に現われるのは、終末におけるキリストの再臨の際であると言える（コロサイ三・三、四、エペソ一・一三、一四）。

それゆえ前述のように聖化は「—である」と同時に「—であれ」である。罪からの解放は、同時に私たちへの命令であり課題である。聖霊によるこのような信仰生活の中にこそ、真実に緊張した道徳的努力がなされてゆくであろう。キリストにあって日々罪に死し、日々新しき生によみがえる、常に新しい信仰生活を送りたい。

四、御霊によって歩きなさい

聖霊によって、私たちの信仰生活は次のように導かれるであろう。(1)聖霊は私たちに神のことを確信させる。百卒長コルネリオがヨッパからペテロを招いて、その話を聞いた時に、「それを聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった」と記されているが、信仰の真理を把握させるものは聖霊である（ヨハネ一六・一三、第一コリント二・九、一六）。私たちは福音の真理が個人の勝手な思想や、多数による決定や、社会情勢などによって曲げられることをさせてはならない。聖霊が常に教会の中に臨んでいたもうように、ひたすら祈り、同時に教会の中に自己の信仰生活を確固として据えていなければならない。(2)聖霊は私たちに力を与える。主イエスは不安の中にある弟子たちに、「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、……地のはてまで、わたしの証人となるであろう」（使徒一・八）と語られた。キリスト者に与えられるものは、「臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである」（第二テモテ一・七）。それゆえ、パウロも、「わたしの言葉もわたしの宣教も、巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によったのである。それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった」と確信をもって語っている。恐れることなく証しをしよう。「言うべきことは、その時に授けられるからである」（マタイ一〇・一九）。(3)聖霊は生命の主でありたもう。神との生ける交わりの中に、私たちは「死にかかっているようであるが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されず、悲しんでいるようであるが、常に喜んで」いることができる（第二コリント六・一—一〇）。「天にまします我らの父よ……」と祈りによって神に呼びかけ得るように、私たちは「神の子」である（ローマ八・一四—一七）。そして神は、弱い私たちを助け、祈れない時にも祈りを与え、万事を益となるようにして下さる。信仰者の生活は、聖霊の助けの中に、確信と感謝と喜びの中に、いよいよ充実してゆくであろう（ローマ八・二六—三九）。

国境、時代を超えてあらゆる人々に発せられているのである。

二、一つの教会　神のみ声を聞いた一つの民の一つの姿をキリスト者は率直に信じている。私たちは単純に、地上の一定の場所に立つ。そこに教会があり、一つの教会がある。私たちがそれぞれ自分の具体的な教会を信ずる時に、私たちは教会の単一性、諸教会の単一性を信ずるのである。私たちがこの教会に働らく聖霊を信ずる場合には、最悪の時にも、他の諸教会から完全に分離されるということはない。様々な差違を軽視したり、その上を浮動したりするのは、真にエキュメニカルなキリスト者ではない。そうではなくて、それぞれ自分の教会において全く具体的に教会であるのが、真にエキュメニカルなキリスト者である。一つびとつの教団のあらゆる差異にもかかわらず、キリストにおいて、互に結ばれているのである。

三、聖なる教会　「聖」ということは、「分離された」という原義をもっている。聖なる教会は、ただキリストの教会であって、その委託、その根拠、その目標によって、この世のいっさいの団体から区別されるべきものである。それゆえ、人間的、地上的な一切の束縛から自由な、普遍的な団体である。

四、公同の教会　「公同の」（カトリック）とは、普遍的および全体性を意味していて、一教会の名称であると誤認してはならない。公同の教会とは、キリストの教会が歴史全体を貫いて自己同一であるということを意味している。教会にはいろいろの弱点、邪曲、誤謬があるが、その本質においては変ることがない。またさまざまな差別や制限をもった、教派的な、あるいは地方的な教会として現われているが、これは普遍的な教会の現実の姿であって、教会の伝える福音は、「ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信ずる者に、救を得させる神の力である」（ローマ一・一六）。

日本基督教団の教憲に、「神は万国万民のうちからキリストに在って聖意に適う者等を召して、これを聖別し、恩寵と真理とをあらわして、聖霊による交わりに与らしめたもう。これがすなわち聖なる公同教会である。……わが国における三十余派の福音主義教会およびその他の伝統をもつ教会は、それぞれ分立して存在していたが、昭和一六年六月二四日くすしき摂理のもとに御霊のたもう一致によって、おのおのその歴史的特質を尊重しつつ聖なる公同教会の交わりに入るに至った。これがすなわち日本基督教団である」と記されているが、良き参考となるであろう。

五、見える教会と見えざる教会　第二次大戦中のエピソード、フランスの一寒村のカトリック教会のミサに出席した者が少数であるのをみて、駐留していた英国の連隊長が老神父をからかった。「今朝のミサには何人出席しましたか」。その神父は答えて言った。「何百万人もいましたよ。」

普遍的な公同教会を考える時に、地上の教会のみを考えるだけではいけない。神との霊的な関係の中に、時間、空間を超えて教会は存在するからである（ヘブル一二・一―二、黙示録七・九―一七）。そして教会は信仰において現在すでに神の国の希望に生きている。「主のこられる時に至るまで」（第一コリント一一・二六）十字架と復活のキリストを想起し、地上の戦いをたたかうのが教会の姿と言えよう。神はキリストを「すべての支配、権威、権力、権勢の上におき、また、この世ばかりでなくきたるべき世においても唱えられる、あらゆる名の上におかれたのである。そして、万物をキリストの足の下に従わせ、彼を万物の上にかしらとして教会に与えられた」のである（エペソ一・二一―二三）。

六、使徒伝来の教会　ニカヤ信条においては、「一にして、聖、公同の」のほかに「使徒伝来の教会を信ず」と付け加えられてい

る事を教えている。仲間となること(fellowship)、交わりを結ぶこと(communion)、参加すること(participation)、寄与すること(contribution)、である。この言葉の根本的な意味は、人が互に共通の所有にあずかる――キリストにあずかることであり、上述の意味は、三つの方向に展開されると言えるであろう。第一は「参加すること」、第二は「寄与すること」、第三は「交わり」である。第一に、神の民の共同の行為である礼拝に生ずる参加しよう。ここで御言葉と讃美と祈りにおいて、神との交わりの基本的な姿勢を兄弟姉妹と共に確立する。第二に、パウロが「マケドニヤとアカヤとの人々は、エルサレムにおる聖徒の中の貧しい人々を援助することに賛成した」(ローマ一五・二六)と記した時、「援助すること」に当る言葉はコイノニア(交わり)である。キリスト者はこの世のあらゆる面において、すべての事をわけあう努力をしたい。苦難も慰めも(第二コリント一・七)、神の国への期待も忍耐もわけあうのである(黙示録一・九)。キリストの交わりという中心的な、神秘的な内容が、エルサレム教会への献金、援助という事と密接に結びあっていることを忘れてはならない。第三に「交わり」であるが、初代教会の人々が、「使徒たちの教を守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき祈をしていた」(使徒二・四二)とあるように、特に聖餐にあずかることによって、キリストとの一致と互いの一致の信仰を深め、完全な共同体の交わりを形成していた事を注目したい。それゆえ特に聖餐式について次に学びたい。

五、聖餐式　「わたしたちが祝福する祝福の杯、それはキリストの血にあずかること(コイノニア)ではないか。わたしたちがさくパン、それはキリストのからだにあずかること(コイノニア)ではないか。パンが一つであるから、わたしたちは多くいても、一つのからだなのである。みんなの者が一つのパンを共にいただくからである」(第一コリント一〇・一六―一七)。ナチスの収容所におけるマルチン・ニーメラー牧師の体験を私たちは知っている。一九四四年のクリスマス、ダハウ収容所で、オランダの大臣、ノルウェーの荷主、英国陸軍中佐、ユーゴーの外交官、マケドニヤの新聞記者が、そしてカルヴィン派、ルター派、英国教会、ギリシヤ正教に属する者が、唯一の聖なる教会を、理解した通りに、実行したことである。「主の晩餐を共に祝うこと以外に何が私たちに残されていたろうか。実際、私たちはそうして来た。そして誰も彼も、同じ師と救主の弟子として私たちを結びつけてくれた交りの中で、本当に心から悦び合ったのである」とニーメラーはその説教集の序文に記している(されど神の言は繋がれたるにあらず」、新教出版社)。私たちの交わりを真実なも聖餐式は古代の儀式の名残りではない。私たちの交わりを真実なものとする主の「このように行いなさい」(第一コリント一一・二四)という至上命令なのである。

教会の公同性

エペソ一・二〇―二三

一、エクレシア　すでに学んだように、教会(エクレシア)は一つの召しによって成立した団体である。イエス・キリストと合体された人々の団体であって、神の召し、選びによるのである。自然に成立し、存続するのでもなければ、人間の決断によるものではない。カルヴァンが教会を「信仰者の部隊」と軍隊用語を用いているのは、ある命令に基いて召集された団体で、自由な合意によるものではないからである。たとえば、民族という協同体と一致する場合には、教会に対する誤解の危険がいつも脅かす。教会は人間の手によって作られ得ない。神によるものである故に、その召しは民族、

道具であることを示している。「わたしたちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝える」（第二コリント四・五）。ただ神の栄光のために、である。何か自分の誇りになるような結果を期待してはならない。私たちは「僕」にすぎない（ルカ一七・一〇）。(3)話す人の報告の内容は、出来事を取り扱わねばならない。キリストの出現の事実、そしてそれが人間の生活に革命を起すことを証したい。私たちがキリスト者になり得たということは奇跡以外の何ものでもない。(4)聞き手に対して決断を迫るものでなければならない。手加減をしたり、相手の出方をみたり、良い加減に福音について語るのを止めよう。おそれることなく、卒直に、誠実に主の証しをしたい。(5)福音は万人のためである。ユダヤ人にもギリシャ人にも宣べ伝えられ、普遍的な教会を、いずこの地にも、いつの時にも、形成してゆくことを忘れてはならないと思う。私たちの教会が、この証しの業に伝道に真実に打ちこんでゆく時、それは万民に対する主の御委託に応えていることになるのである。

三、奉仕　キリストが人のかたちをとりたもうて、私たちの困窮のただ中に入り込み来りたもうて、助け、励まし、慰め、仕えて下さった、その足跡に従いたいと思う。エキュメニカル運動によって、合同教会に奉仕する道は、三つあると考えられる。(1)教会が互に奉仕しあうべき義務を新たに覚えて、その道を備えねばならない。「外国伝道」（ミッション）が、先進国の後進国に対する指導という意味から脱却して、相互に賜物をわかちあう事に発展したことは今度のニューデリー大会で最後的に確認されるであろう。日本の教会も受ける教会から与える教会に成長したいものと思う。乞食根性を捨てよう。(2)教会は自己の立つ社会に仕えるものでなければならない。教会は孤立してはならない。クレーマー博士の言われる「散らされた民としての教会」の意味もここにある。信徒一人びとりも同じである。会社でキリスト者であることを隠すような現状を一日も早く打破しようではないか。(3)教会は互に連絡を密接にして奉仕を行い、大きな力としなければならない。たとえばWCCが第二次大戦後、移住民、避難民に新しい住居を与えたことは大きな奉仕である。各国、各教会相互の協力なしには不可能であった。

四、キリストにある一致　エキュメニカル運動との関係において、キリストにある一致の四つの意味を学ぼう。(1)共通の使命の中にすでに含まれている一致。一九三七年、エディンバラの信仰職制会議は、「この一致は、われわれの心の同意やわれわれの意志の一致によってできるものでなく、……それはイエス・キリスト御自身の中に基礎づけられている。……われわれが一つであるのは、われわれが皆、神の愛と恵みの対象であり、また神によって全世界において神の栄光に満てる福音を証しすべく召されているからである」と主張している。(2)共通の使命を実践する時に成長する一致。初めは一致しない点があってもよい。まず行動を開始せよ。その時、一致の成長を体験する。今日の姿にまで成長したWCCはその良き証しである。一つの聖なるキリストにある教会の真の「一つであること」を目指して、私たちの祈りと業とを不断に励まねばならない。(3)信仰と職制とにおける教会の一致。現実の教会では未だ聖餐式を一緒に執行し、また受領することの不可能、互の職制を完全に認めたいことというような不一致が現存する。理想論や観念論をもてあそぶのでなく、現実の事柄を一つびとつ解決してゆきたい。(4)キリストにおける究極的一致。キリストの中で成長する努力は、アウグスチヌスの言葉を借りるならば、「やがて完成の域に達する」ものであろう。その完全な実現は救いの最後の完成の時に起るからである。そしてこの信仰のゆえにこそ、今、ここにおける一致への努力に、喜びと希望とをもって進み得るのである。

る。これは、バルトの説く所に従うならば、上述の三つの表現と同列ではなく、その説明である。教会を、自然的、歴史的な性格をもった他のすべての団体から区別するものは、次のように言える。それは、教会が使徒伝来の教会であって、使徒の証しに基き、その証しを伝承し、その証しを聞くことによって設立され、また絶えず新しく設立されるという事実である。これをさらに、三つの事柄として明らかにする。すなわち、第一に、キリストは、教会がそこから由来する方であるだけではなく、教会を統治する方である。第二に、教会の生の全体は、宣教の実行の中にのみ生きられるという決定的な事柄である。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」（マルコ一六・一五）、教会はこの委託に仕えているか否かによって、その生を真実に生きているか否かを問われるのである。第三に、教会は神の国という目標をもつ。その時、貧弱な姿の教会に固着することができる。「汝はここに留ってよろしい。神の国は来る。それ故、汝は神の国に向かって飛行を開始する必要はない。汝の汝の立場に立ち、汝の場所において、『神の言の奉仕者』であれ。」このような勧めと励ましをうけ、教会は、待ちつつ、また急ぎつつ、主の将来に向かって進むのである。

信徒として公同教会に対する奉仕

第一コリント一二・一二―三一

一、WCCニューデリー大会　見えざる普遍的な公同教会を覚えつつ、今、此処で、私たちが公同教会に具体的に奉仕しようとする時、今年開かれる大きな協議会を直ちに思い起さねばならない。

世界教会協議会はすでに五月のクラスで学んだように、第一回大会が一九四八年、オランダのアムステルダムで開かれ、以後六年ごとに開かれることになっている。第二回は米国エバンストン、第三回が今年、十一月十八日から一二月六日まで、インドのニューデリーで開かれる。初めてのアジアにおける大会である。

会議の主題は「イエス・キリスト――世の光」である。この下に三つの副題があり、参加者は三部門にわかれて協議をする。それは「証し」（Witness）、「奉仕」（Service）、「一致」（Unity）である。主題についての研究はやがて日本のNCCでも飜訳、出版するであろうし、WCCの総主事ヴィサー・トーフト博士の著書「新しき教会の生命と使命」（新教新書）、「福音と世界」一九六一年四月号は私たちの勉強にまことに有益である。

日本からは日本基督教団と日本聖公会が参加し、世界で一七八の教会、その会員三億一五〇〇万、五〇ケ国から、六二五人の議員が出席し、その他の代表をあわせ千人に及ぶ。私たちは、この大会を外国の集会ではなく、自分のこととして、公同教会に貢献しようとする現実の教会の業に関心をもちたいものである。

ここでは、ヴィサー・トーフト博士により、三つの副主題を学ぶことによって、公同教会に対する私たちの在り方、なすべき事柄を学んでゆきたいと思う。

二、証し　新約聖書において、神の御言葉を伝えることを表わすのに、三つの主な言葉が見出される。ケリュッセイン（布告する）、ユーアンゲリゼスタイ（良きおとずれを告げる）、マルチュレイン（証言する）である。これらに共通する意味を次に学びたい。(1)布告し、よきおとずれを伝え、証しをするのは、一つの特別な命令を基礎としてなされる。私たちは「キリストの手紙」（第二コリント三・三）、「キリストの使者」（同五・二〇）である自覚を明確に持ちたい。自己の能力のゆえでなく、キリストの御委託であることを思って、大胆に伝道したいと思う。(2)上述の三つの表現は、話す人が全くの

い。「嬰児は教会の中で一個の独立した身分を持っているか」という質問は愚問で、身分をもつように取扱い配慮してやれば身分をもち、そうでなければもちえない存在なのだ。（だから教会員の子供が生れた時には、小児洗礼又は献児礼によって、教会全体が愛の共同体の中に受け入れてやることが必要だ）。

嬰児科の教師

教会学校の中で嬰児科を始めるためにはまずよい教師をえなくてはならない。若い牧師夫人が当ることをすすめる人があるが、日曜日の朝、牧師夫人というのは非常に多忙であるために専心これに当れない。牧師夫人はむしろ週間の訪問や、若夫婦会の指導の時に、嬰児科の教師になれるように勉強しておくべきだと思う。日曜日の朝、といっても、礼拝前の一時間の教会学校の時間に嬰児科のクラスをもつことは至難の業で、むしろ礼拝中、別の部屋で嬰児の世話をする時が、クラスに相当するものであり、教会によっては礼拝後、成人科のクラスや若夫婦会をもつ所があるが、その時もクラスの時間となるであろう。そのクラスに対しては、牧師夫人以外に、教会の中で、中年の婦人で子供を二、三人育てたことがあり、そろそろ自分の子供には手がかからないようになった婦人が、教師に献身することをすすめたい。

その教師はもちろん信仰的にしっかりした人であること、子供の教育の経験者で、かつ嬰児のパーソナリティについて多少研究し、若い母親に対して尊敬をえられる人でなければならない。自ら献身する人があればこれに越したことはないが、教会の方からこれはと思う人に白羽の矢を立てて、すすめ、育児の本を読んで勉強してもらうことをしたらよい。私としては左三冊を読めば、まず最低の条件はえられると思う。

嬰児科の施設

ある程度の施設は絶対必要である。礼拝の時間に嬰児を寝かせる部屋と寝台、布団、二才時からはおもちゃや絵本類を用意しておくこと。ベビー・ルームがあって、会堂の片隅にガラス張りで、マイクとスピーカーで母親も一緒に礼拝できるような部屋を作ることは最も理想的であるが、そうでない場合は、牧師館の畳の部屋、それにせめてスピーカーの装置ぐらいほしい。

嬰児科のカリキュラム

カリキュラムといっても、言葉を通して福音の内容を教えるわけにはゆかない。しかし言葉・思考の発達する以前の子供でも、外界と交流する器官はもっている。それは感覚と感情である。福音は「愛」という媒体を通し、嬰児の感覚と感情に訴えて把握せられる。嬰児は自分が受け入れられているか、拒否せられているか、教会という場所は快適なところか不快なところかということを感覚を通して本能的に直観し、その気持を感情で現わす。

たとえば礼拝堂に母親と一緒に入れられた子供が、泣いたり騒いだりすることによって周囲の人に嫌われれば、彼らは本能的に教会は自分を拒否し、不快な場所だということを直覚し、一生潜在意識の中にそれが残る。

従って嬰児は別な部屋で、安らかな睡眠や（乳児の場合）、自分の家にはない豊富なおもちゃ（二、三才の場合）、そして必要な牛乳やおやつが与えられることによって、教会を好きになり、愛せられている経験をもつ。それでいいのだ。つまり嬰児科のカリキュラムというのは環境的内容のことであり、愛のカリキュラムと考えたらよい。

言葉によるカリキュラムはむしろ母親に対してなさるべきであり、

一、キリスト教の信仰指導

二、キリスト者家庭の形成

三、育児の知識

の三項目が、機会あるごとに母親に対してなされなければならない。

（岩村信二）

嬰児科を作ろう

嬰児科とは

教会学校には幼稚科の前に「嬰児科」というものがあるべきであることについて聞いて知っている人も、さて嬰児科とはどんなことをするところだろうか、もののわからぬ嬰児に何を教えたらいいのだろうかと疑問に思う人が多いと思う。その必要性を感じつつも、さて何から手をつけたらいいかわからぬ人もいる。

なるほど嬰児科は日本の教会ではわかっていても、なかなか手がつけにくいむずかしさがある。第一によい指導者が得がたいこと、第二に適当な施設がないこと、第三に何をしたらよいのか教科内容（カリキュラム）がはっきりしていないことなどが、現在の日本で嬰児科の発達しない理由となっている。

嬰児とは

ここでいう「嬰児」とは新生児から満三才まで、すなわち幼稚園に通えるまでの年令の子供をいう。この時代は一口に「嬰児」又は「赤ちゃん」といって、同じように取扱いがちであるが、実はこの三年間の嬰児の発達は、その後の三年間の人間の成長に比べて、目には見えないが、異常な速度で変化発展しているので、三年一くぎりでもまだ大雑把過ぎるので、一年、二年、三年と、少くとも一年毎に区別してかからねばならない。一才から三才までに嬰児が学習する量とその努力は、その後一生にわたる学習と量にも匹敵するといわれ、又人間のパーソナリティの基本的型はこの時代に出来うるともいわれる。生れてから一年間を、「新生児」又は「乳児」ともいって区別する学者もいる。

嬰児のパーソナリティ

最近嬰児のパーソナリティ（性格）について良書が出て来た。巷間ベスト・セラーになっている。

○松田道雄「私は赤ちゃん」、岩波新書、一〇〇円（生れてから一才半まで）

○松田道雄「私は二歳」、岩波新書、一〇〇円。

右の二冊は医学者の立場から嬰児の心理・身体の発達を面白く書いている。又基本的なものとしては

○山下俊郎「児童心理学、子供の心はいかに発達するか」、光文社、四五〇円、第一篇を推薦する。嬰児科の教師として座右におくべきテキストである。

ここに詳しく嬰児のパーソナリティを述べる余裕はないが、基本的なこととして知っておかねばならぬことは

〔新生児〕　一日のうち七〇～八〇％の時間は眠って暮している。パーソナリティの活動としては、運動、単純な感覚、素材な感情の三つが見られるだけである。

〔二才から三才〕　右の三つの活動がやや分化し、複雑になり、他人や環境に対して目だった行動をとるようになり、三才からいわゆる「自我」の発達があらわれ、反抗期が始まる。言語、思考、感情などもや、複雑なものとなってくる。

総じて嬰児期の特徴は「他と共にある存在」であって、まだ自分独りでは立ちえない。その第一は親であり、次に愛情をもった教師である。嬰児も教会の中で、その親や教師と共に一個の身分をもったものとして取扱いた

上で遊んでいました。ゴー然と音をたてて車がバク進してきました。「アッ」と叫んで、ひとりの婦人が夢中でその子をだきかかえ、軌道のそとにバッタリたおれました。間一髪でした。その子はけがひとつせずに助かりました。だが、急停車をした運転士は、その婦人に「バカ野郎」と口ぎたなくののしりました。乗客も窓から顔を出して眺めていました。おそらく、人々は、その婦人の子であると思っていたのでしょう。しかしその婦人は一言も弁解しませんでした。ののしられても、どなられても、「ああ、良いことをした、人さまの子を助けることができた」という心の深くにいいがたい喜びがあったからです。ですから、外側のいやなことも気になりませんでした。彼女はニッコリほほえんでさえいました。わたしたちが、信仰によって、神の愛を知り、その愛に励まされてほんとうに良い奉仕をしていたら、わたしたちにも世の人の知らない喜びがあるはずです。良いことをするということは、こんなにもうれしいものかと感ぜられる喜びです。代々の聖書が、困苦の中になお喜ぶことができたのは、みなこのことを体得していたからにそういありません。

万物をもつ喜び

さらにパウロは「何も持たないようであるが、すべての物を持っている」と結んでいます。彼はほんとうに無一物でした。テモテに書いた手紙に着換えを持参するように頼んでいますが（第二テモテ四・一三）、おそらく、着たきりの生活ではなかったでしょうか。一身にビタ一文もなく、みずから労働してくらしの資を得ていました。

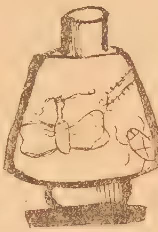
けれども彼はキリストにおいて天地の創造主、その摂理者を自分の父と仰ぐことができるようになりました。神を有することは、実にすべての物を持つことです。信仰において、彼こそ無尽蔵の富を得ました。この世の人の知らない最も富んだ人でした。

この世の宝はどれほどたくさんあっても、いつか滅びていきます。しかしこの神にある信仰の宝は、どんなことがあっても、滅びません。大正十二年、関東震災で、東京から横浜にかけて焼野が原となってしまいました。その時、宣教師のマトハが故国に打った電報の第一信は「スベテハナクナッタ。タダカミニオケルシンコウヲノコシテ」というのでした。いっさいはなくなりました。けれども、この神における信仰、これさえ確実にもっているならば、そこに希望が生まれ、喜びが湧いてきます。旧約聖書のヨブはどうしたか。十人の子供を天災で失い、財産はなくなってしまい、自分はらい病になり、妻から　捨てられ、友からもかえりみられなくなりました。けれども彼は「わたしをあがなう者は生きておられる」（一九・二五）といってそれによく耐え、静かな仕合わせと生きることの喜びとを失わなかったのです。

パウロはローマ人への手紙の中で「神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵し得ようか」（八・三一）といっています。神と共に生きることにまさって心強いものはありません。さらに彼はピリピ人への手紙で、「わたしは貧に処する道を知っており、富におる道を知っている。わたしは飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に処する秘けつを心得ている」（四・一二）といっています。信仰においてすべてのものをもつ喜びとは実にこのようなものです。多くの人々は貧に処する道を知らずに貧乏しています。だから人をうらみ世をのろいます。また他の人々は富におる道を知らずに富んでいます。それでゴー慢になり軽薄にながれます。わたしたちもパウロのように、しっかりした信仰をもって、すべてのことに処する秘けつを得たいものです。

（山内六郎）

まことの喜び



聖書　第二コリント六・一－一〇。

聖書をみますと、使徒パウロは、「常に喜んでおり」といっています。「常に」とは、うれしい時も悲しいときも、仕合わせな時もつらいときもです。まことの喜びというものは、そうしたものでなくてはなりません。聖書のその前をみると、極度の忍苦とか、患難とか、危機とか、行き詰りとか、むち打たれるとか、入獄とか、騒乱とか労苦とか徹夜とか飢餓とかいう字が出ています。彼は伝道のために人の想像を絶する苦労をなめました。また身にはひどい病いをもっていました（第二コリント一二・九）。ローマの市民権をもつ家柄、学問は大学者ガマリエルの高弟、置位はユダヤ最高議会の議員であった彼が、今や一介の伝道者となって、「飢え、かわき、裸にされ、打たれ、宿なしであり、苦労して自分の手で働き、はずかしめられ、迫害され、ののしられ……この世のちりのように、人間のくずのように」（第一コリント六・一一－一三）取り扱われました。それでも彼は喜ぶことができたのです。なぜだったでしょう。

主にある喜び

この世の普通の喜びは外側からまいります。健康であるとか、財産があるとか。こうして自分の肉欲が満足させられ、虚栄心がみたされる時に、人は喜びを感じます。

そうした外側のものも確かに喜びを人に与えます。しかし、そうした外側のものは、永続的なものではありません。今日鉄石のような健康を誇っている人が、明日は死の床に伏さねばならないのが人生なのです。今、成功の絶頂に得意満面の者が、次の瞬間には夢くずれて失意のどん底に泣かねばならないのが、この世の常なのです。ですから、そうしたものにたよる喜びほどはかないものはございません。またよしそんなものが、どんなに豊かに満足されても、人間が豚でない以上、そんな喜びだけにはいつかたえられないようになってまいります。事実、ローマが富み栄えて肉欲的物質文明が最も進んだとき、自殺者がいちばん多かったといわれています。

では、パウロは、どうして外側の状況が悲惨を極めた時にもなお喜ぶことができたのでしょうか。彼は、冷たい暗い獄中から、人々を励まして、「主にあって喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい」（ピリピ四・四）といっています。主にあって喜ぶのです。これは信仰の喜びです。内側の、最も深いところから来る喜びです。外側にどんな荒波が立ち騒いでいても、それによって乱されることのない平安です。神と和らぎ、神と交わって生きるところから来る感謝です。一時的な気まぐれの喜びではありません。人の世の晴れた日にも曇った人にも、ひとしく体得されるまことの喜びです。パウロがもっていた秘決は実にこれでありました。

奉仕の喜び

次ぎにパウロは「貧しいようであるが多くの人を富ませ」といっています。主にある人は、豊かな奉仕を営むことができます。それがまたこの世の喜びとちがった喜びを与えてくれるものです。パウロは、自分がどんな境遇にある時でも人を助け、人を励まし、人を慰めていくことができました。こんな喜びがどこにありましょう。

よちよち歩きのできる幼児が電車の軌道の

北海道教会教育講習会

1961年8月1日～3日

定山渓・大虚荘

主　題

教　　会

全体講義

旧約聖書の扱い方（奇跡の理解）……馬場嘉市
教会の教育的働きについて……山北多喜彦
聖書の話をどう語るか……小出正吾
教会の本質……高柳伊三郎

分団研究

1分団　小学科上級の分級指導と実際……馬場嘉市
2分団　小学科中級　指導と実際……山元春雄
3分団　小学科下級の分級指導と実際……小出正吾
4分団　グループ指導（中学生対象）……石川和夫
5分団　グループ指導（高校生対象）……戸川隆
6分団　教会学校の音楽……柴田勝
7分団　教会学校の牧会……山北多喜彦
8分団　単級形式のＣＳ……小林誠治
9分団　教会学校の管理……

申込み方法

定員　100名
費用　登録費200円　会費300円　宿泊費1,200円　計1,700円
手続　申込み用紙に所定の事項を書き入れ費用をそえて御申込み下さい。
〆切期日　7月15日（期日前に定員に達した場合は締切ります）
申込先　札幌市大通り西1―14　北光教会　新関ヨコ

主催　**NCC教会学校部**　**NCC視聴覚事業部**

……キリトリ線……

申込書

職業	
希望分団	第　　分団（第2希望　　分団）
送金方法	現金書留 振替 為替　　月　日 ¥
備考	（18分団の方は視聴覚経歴を御記入ください）

キリスト教教育講習会

1961年7月25日～28日

中軽井沢・星野温泉

教会とその働き

── 全体講義 ──

日本文化とキリスト教教育	北森嘉蔵
教会の教育的機能について	山北多喜彦
キリスト教視聴覚概論	小川清司

── 特別講演 ──

教会美術	田中忠雄
教会音楽	池宮英才

── 分団研究 ──

1分団	中高生の分級指導法	三浦義和
2分団	小学科上級の分級指導法	岡村正二
3分団	小学科中級の分級指導法	松川成夫
4分団	小学科下級の分級指導法	中島渼子
5分団	幼稚科の分級指導法	吉崎もとえ
6分団	児童への話の仕方	田坂惇巳
7分団	幼児への話の仕方	遠藤君子
8分団	レクリエーション指導法	高橋四郎
9分団	音楽	池宮英才
10分団	絵ばなしの作り方	上田澄子
11分団	絵ばなしのやり方，略画，ポスターのかき方	上田次郎
12分団	セロファン紙芝居	木俣 武，丸山正昭
13分団	人形芝居の人形の作り方	山本和子
14分団	幻灯フィルムの作り方	ロスマン，中川浩之
15分団	フランネルグラフ	山田 稔，清水健至
16分団	映写機取扱法	中西茂登吉
17分団	謄写版印刷	福田秀雄
18分団	視聴覚ゼミナール	原恵，外

── 申込み方法 ──

定員 300名

費用 登録費500円　宿泊費2,100円（3泊4日）　合計2,600円

手続 申込用紙に所定の事項を記入し費用をそえて御申込み下さい。

締切日 7月15日（期日前に定員に達した場合は締切ります。）

申込先 東京都渋谷区緑丘22　基督教視聴覚センター内　講習会係

主催 NCC視聴覚事業部　NCC教会学校部

第10回 教会学校全国大会



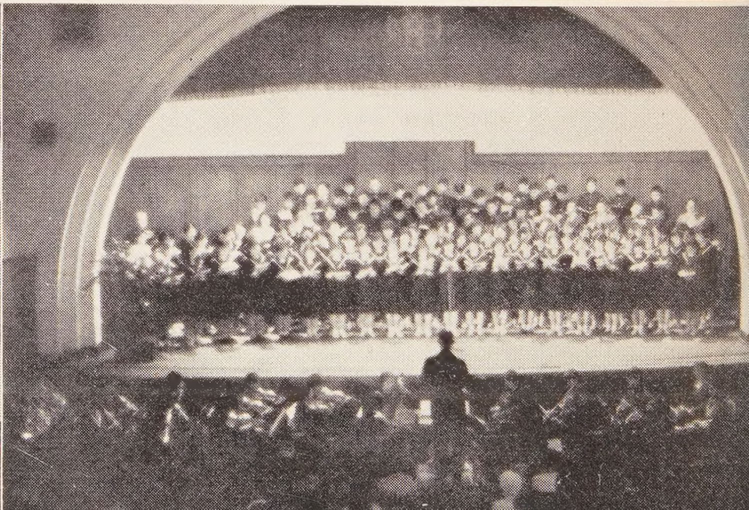
↑ パネル・ディスカッション



歓迎の辞をのべる木島徳治現地委員長 →

ゴールデン・ウィークの五月三、四日の両日に、名古屋の金城学院を会場とした全国教会学校大会は、五〇〇名の参加者を得て開かれた。現代のめまぐるしく変動する社会状勢の中にあってキリストの福音はどのように伝えらなければならないか、その教育的活動についてが中心議題となり、社会学的見地から、心理学的な角度から、教育的立場から普通社会の発展課程とキリスト教界内の動きが俎上に取りあげられ研究されるという、このような大会には始めての形式のパネル方式が用いられ、それが分団に引きつがれた。これは今までの講師から参加者への一方交通的なものから脱皮して、参加者一同が課題をうけもって、自分たちの現場にもち帰り、その場に適した活動をするためのエッセンスを公開したといってよいであろう。

↓ 金城・名古屋の両学院生徒のオーケストラと合唱



↓ 青少年問題を語る松下正寿博士



表紙の解説

三位一体のシンボル

三位一体のシンボルはいろいろあるが、基本になるものは円と三角である。円は始めも終りもないかたちで、永遠にいましてひとりでありたもう神を表わしている。三角は三辺が同じの正三角形で、神は父と子と聖霊の三つの人格を指し、これらの三つは平等であることを示している。そこで、この円と正三角を組みあわせたものが、三体一体を表わすことになる。三つ輪や円の中のクローバー等もあるが、いずれはその変形である。

前月号の表紙は、わかめかと思われた方があるかもしれないが、あれは七つにわかれた焔のかたちで、聖霊のシンボルであり、ペンテコステにちなんだものであったのである。念のため。

名古屋こぼれ話二題

《桜通り》

名古屋駅から正面の真っすぐの並木にかこまれた広い通りは「桜通り」と言われているが、これは当教会学校の平田理事が募集に応じて当選したものだそうである。名古屋に行かれたらぜひこの道を通られたし。

《牛 馬 用 水》

去る五月三日、四日に開かれた全国教会学校大会の会場となった名古屋の金城学院高等学校の正面入口すぐそばのところに写真のような水溜りがある。牛馬用水と書かれてあった。現代の人にはすぐピンとこないかも知れないが、これは金城学院の建てられている前の通りは、昔、瀬戸街道といって、この道を瀬戸物の荷車が往き来していたそうであるがその重い荷車を引く牛や馬のあえぐ姿を見た宣教師が、人のための水呑場のそばに、牛馬のための水呑場を作ってやったのだそうである。今は都市計画などでその位置も少し変えられてしまったが、その精神を記念して金城の中にこの牛馬用水が残されている。



下の申込書はどの講習会にも共通です。

氏（ふりがな）名		男　女 才	
住　所			
教会名及び役目		教師経験年数	年
		担当級	年

昭和二十八年八月十日第三種郵便物認可
昭和三十六年六月一日発行
発行人　山北多喜彦
印刷所　精文堂印刷株式会社

教会教育　第九五号

定価四〇円（〒共）
半年分　二三〇円
一年分　四五〇円

発行所

東京都中央区銀座四の二
日本基督教協議会　教会学校部
振替東京九八七一三番

季　刊

World Christian Education

1 部　¥ 150

1 年　¥ 500

世界各国のキリスト教教育活動のようす。来年夏の アイルランドで 開かれる世界キリスト教教育研究協議会の課題。その他 キリスト教の 国際情報を知るに最適の雑誌。

取扱い所・ 東京都中央区銀座4—2　　NCC教会学校部

イエスは

子供の友

申込先
東京都中央区
銀座　4—2
NCC
教会学校部

イエス・キリストの御生涯を子供のために物語り風に書いた色刷りさし絵入りの小冊子，夏期学校の教科書に，病気のお見舞にぜひお用い下さい。

1 部　10 円
（50部以上1割引）